

平成 2 2 年 度

研 究 紀 要

創

TSUKURU

第 1 3 号



北海道今金高等養護学校

巻 頭 言

本校は先日、１２回目の卒業式を行い、２１名の生徒を社会に送り出しました。近年の産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化と長引く不況、そして福祉行政の制度変更等は、進路先の決定をとて困難な状況にしております。そのような中で全員の進路が決まり、送り出せたことに安堵するものの、同時に一抹の不安を抱えているのも確かです。社会への移行を進める特別支援学校高等部としては、常に社会の有り様に注視しながらも、時代の流れを正しくキャッチし、今、生徒達が高等部の３年間で何を学び、何を身につけることができたかを常に問うことが必要ではないでしょうか。

さて、本校は昨年度から第５次研究として、研究主題を「社会参加・自立をめざした働く力の育成」として、主に教育課程の編成と授業の充実を目指した研究を推進してきました。

研究の中心は、各学年毎のグループ研究です。１学年は主題を「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし、考え、伝える力の指導」としてコミュニケーション能力を高める指導の在り方について取り組みました。２学年は主題を「教科指導と領域・教科を合わせた指導との連携による働く力の育成」として基礎的な知識や技能を活用する力を育む授業在り方について取り組みました。そして３学年は、「社会生活における人とのかわり方を身につけるための支援の在り方」を主題に、事例研究に継続して取り組みました。

また、プロジェクト研究としては、本校のような職業学科を置く特別支援学校高等部各校の教育支援計画と指導計画、通知表を集約し、本校としての在り方を再検討しております。

本研究は、年次研究２年目のまとめとしたものですが、内容は十分に討議し、研究されているものとは言えません。皆様にご高覧いただき、忌憚のない意見をいただくことにより、よりよい研究にしたいと思っております。今後も、本校へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成２３年３月

北海道今金高等養護学校長

播 磨 正 一

目 次

< 巻頭言 >

第 章 研究の取り組み - 1 ~ 6

第 章 課題研究

1 学年 - 1 -1 ~ 8

2 学年 - 2 -1 ~ 15

3 学年 - 3 -1 ~ 13

第 章 プロジェクト研究 - 1 ~ 14

第 章 寄宿舍の研究 - 1 ~ 11

第 章 研究の成果と課題 - 1 ~ 2

< あとがき >

< 共同研究者 >

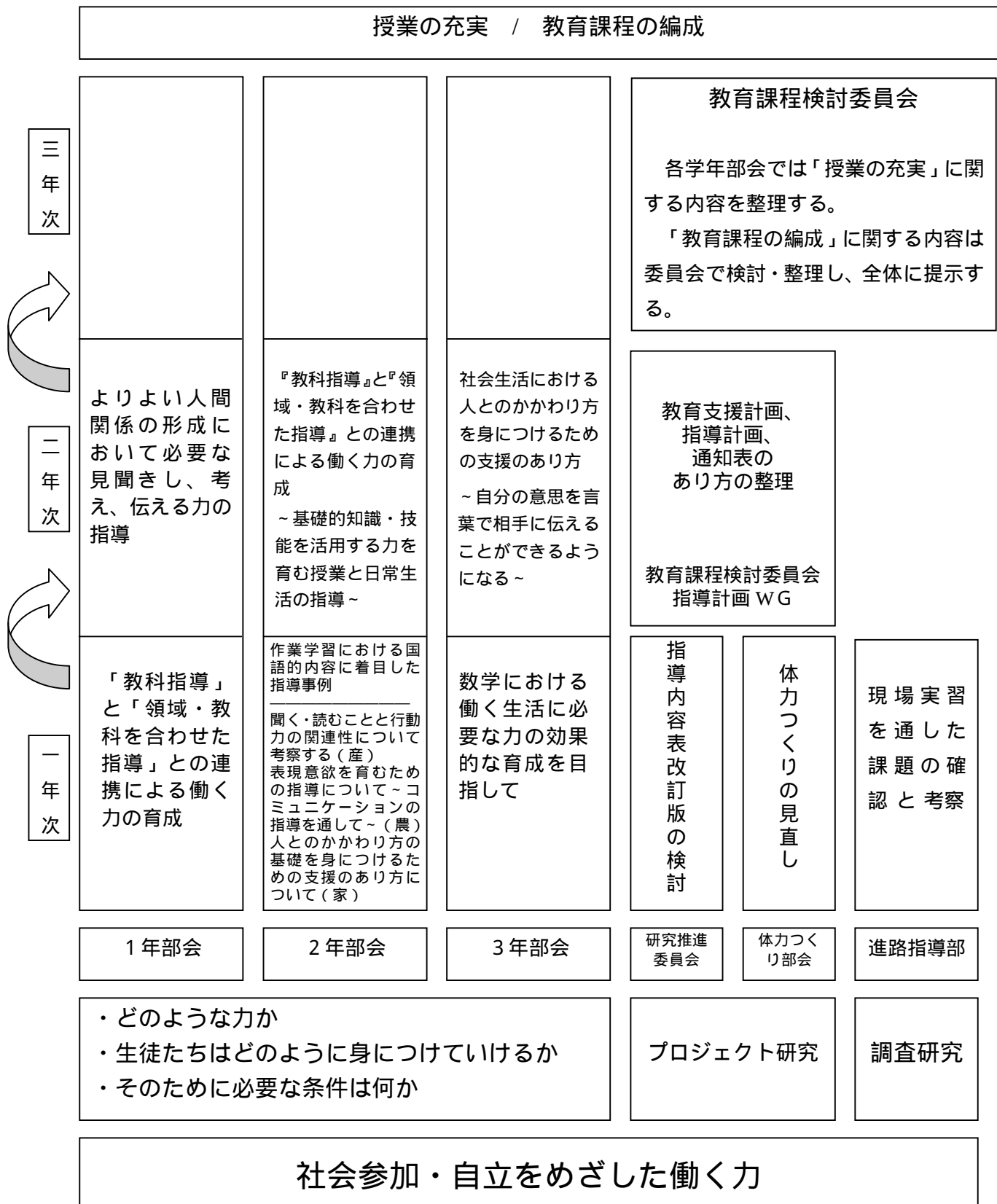
第Ⅰ章

研究の取り組み

- 1 研究主題 「社会参加・自立をめざした働く力の育成」
～ 教育課程の編成と授業の充実を目指して ～
- 2 研究期間 第5次研究：平成21～23年度の3カ年
- 3 主題設定の理由
本校の生徒たちは、卒業後社会の一員として生活を送ることになる。それぞれの特性などにより進路先は多様ではあるが、一人一人の生徒たちは、社会の一員として自立をめざすこととなる。そのためには、在学中から「働く力」を身につけていかななくてはならない。生徒たちが社会参加や自立をめざす上で、どのように働く力を育成していくか、3カ年を通して教育課程の編成と日々の授業の充実を目指しながら検証していきたい。
働く力を幾つかの要素に分け、それらを育成するための効率的な方法を探り、実践に生かしていくことをめざし、本主題を設定した。
- 4 研究グループと内容：
課題研究 各学年（国語、数学、生単、作業から2つ以上を関連づけて選択）
内容は、事例研究、授業研究、教材教具研究を含め、3カ年の見通しをもって各学年で計画する。
プロジェクト研究：
一年次 体力づくりの見直し（体力づくり部会）
～ 生徒個々の運動能力に応じたきめ細かな取り組みを探る～
指導内容表の検討（研究推進委員会）
二年次 教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理
調査研究：一年次 進路指導部「現場実習を通じた課題の確認と考察」
全員がいずれかのグループに所属し、なるべく重ならないように配慮する。
- 5 進め方：課題研究は学年会にて、プロジェクト研究は、体力づくりは教科部会にて、指導内容表は研究推進委員会にて、支援計画等の整理は教育課程検討委員会のワーキンググループにて、調査研究は進路部会にて進める。
課題研究の研究組織は、基本的に所属する学年で3年間継続して行うことを原則とする。
- 6 3カ年の流れの例：
1年次 ○取り上げた形態教科から、「社会参加・自立をめざした働く力」を身につけるために必要な要素を、指導内容表を元に整理する。
○その要素を身につけるために、どのように授業の中で展開できるか仮説を立てる。
例：（数学の場合）「お金を自分で管理し、適切な使い方を覚えることにより、働く力（意欲）が高まる」
2年次 ○立てた仮説を検証するに当たり効率的に授業を展開できる方法を探る。
○教材教具や学習プリントなどの開発（作成）や授業の工夫をする。
例：計算機を使った計算問題、家計簿（小遣い帳）の使用、生活に必要な物や欲しい物の値段をインターネットなどで調べる。
3年次 ○仮説を検証する。
○研究授業を行う。
学年全体で取り組み、対象の形態教科担当者のみで行うことのないように周囲で配慮する。
所属する学年によっては、3カ年間同じ生徒が対象になるとは限らない。
教師の働きかけ、生徒の様子、変化、配慮や工夫をした点等について、客観的な記録をとる。

校内研究 第5次研究の構造図

日々の授業の中から、生徒が働く力を身につけていく上で課題となる点を取り上げて整理し、どのような方法で授業に反映することができるかを 3ヵ年の研究を通して校内全体で考えていきたい。



■ 全体研修会

第1回（平成22年4月16日）

- （1）校内研究・研修計画
- （2）グループワーク「よりよい学校を目指して」

第2回（6月11日）

- （1）校内研究、各グループのテーマ発表
- （2）全体討議「本校における他学科作業のあり方」

第3回（10月29日）

- （1）校内研究中間発表
- （2）研修会参加報告会

平成22年度特別支援学校新教育課程説明会 報告（中島T）

平成22年度特別支援教育キャリア教育研修講座 報告（矢倉T）

第4回（平成23年2月18日）

- （1）校内研究報告会

■ 研究推進委員会

第1回（平成22年4月6日）

全体研修会について

第2回（10月22日）

全体研修会について

プロジェクト研究について

第3回（平成23年2月9日）

全体研修会について

プロジェクト研究について

■ 特別支援教育研修会

日時 平成22年7月27日(火) 9:30~15:00

場所 本校体育館

全体テーマ 『子どもの学びと発達を新しい視点で見直す教育を!』

セクション (基礎理論編) 『子どもの学びと発達を考える』

セクション (実践編) 『支援のコツとアイデアを学ぶ』

講師 東京都立港特別支援学校 主任教諭(特別支援教育コーディネーター) 川上 康則 氏

内容

<セクション>

発達に支援が必要な背景

「未学習」「誤学習」が挙げられる。

特別支援教育業界の5大禁句 これでは育たない

ダメ! 早く! ちがう! ちゃんとやって! いいかげんにして!

二次的障害はなぜ起こる?

- ・もともとのつまづきに対して、「未形成」と見るか「努力不足」と見るかで変わってくる。
- ・「未形成」と見れば二次的障害は起こりにくい。
- ・未形成な子を努力不足な子と解釈してしまうと、「できて当然なのに」と見てしまう。

SSTの基本

- ・モデル提示 こんなふうにするといいよ、というお手本。
- ・スキル提示 「こうするんだよね」と、次の行動を示す。
- ・リハーサル 事後の復習よりも事前の練習が大切。
- ・評価場面を逃がさない 当たり前のことをあえて誉めてあげることで理解する。

「うまくいかなさ」の背景

- ・目に見える行動はほんの一部で、目に見えない背景要因が大きく存在する。
- ・「わがまま」と誤解されやすい触覚過敏(触覚防衛)

触覚には「一般的な触覚(識別系)」と「原始的な触覚(原始系)」がある。

「一般的な触覚」は知的触覚で、「原始的な触覚」は生きていくための触覚。

触覚過敏の強い子の特徴

- ・集団での取り組みが苦手。
- ・他者に自分のペースを乱されることや、介入されることを嫌がる。
- ・自立心が強い。(触れさせないようにするため)
- ・言語性>動作性 の場合、暴言・汚言が激しい。
- ・偏食が伴うことが多い。(白飯好き、野菜嫌いなど)
- ・保護者も悩んでいることが多い。(母親が一人で抱えているケースが大半)

触覚防衛反応がもたらす主な二次的障害

- ・触覚防衛反応を示す子どもの多くが、対人関係にも大きな問題をもつ。
- ・発達行動やスキンシップが滞り、人との関わりの発達が歪んでしまう。自分が好きな感触の遊びに固執したりなど、道具への関わりが狭まってしまう。警戒心、情緒不安定から注意力の発達も阻害されてしまう。

仮説を立てて、課題を焦点化しよう!

「教師のねらい」と「子どもの目標」の整理

「触れる」ことを題材にした授業の配慮点

- ・単に、たくさんの素材に触れることだけでは「触覚防衛」等の問題の根本的な解決には結びつきにくい。
- ・重要なことは、“What”（何を触れさせるか）ではなく、“Why”（なぜその素材や活動を選んだか）と、“How”（どのように働きかけるか）である。

子どもの教育ニーズを踏まえた指導とは

- ・「仮説」を立てながら指導にあたる。

知的障がい児の場合、平衡感覚のつまりきが視空間認知のつまりきに影響を及ぼしやすい。

認知発達のおおまかな流れ

- （１）触ってわかる世界
- （２）見てわかる世界
- （３）目の前になくてもわかる世界（ことばの世界）

自立活動の６区分は、別個の発達の要素ではなく、網目のように密接に関連し合っている。

「認知」「言語」「記憶」「注意・集中」「未学習・誤学習」「選択的注意」「行動企画」

「視空間認知」「感覚の過敏・鈍麻」「目と手の協応」「姿勢保持」

子どもたちの学びには、発達の視点が不可欠。

- ・子どもを通して学ぶ
- ・子どもを通して目を肥やす

→子どもたちの実態を的確にとらえる。

= 妥当性の高い仮説を立てられる。

< セクション >

発達障がいの特性

- ・健常児との連続性が存在する。
- ・加齢・発達・教育的介入により、臨床像が著しく変化する。
- ・個々の障がい、互いに重なり合う可能性がある。
- ・視点の違いによって診断が相違してしまう。
- ・理解不足による介入の誤りが生じやすい。
- ・二次的障害が生じやすい。

診断名は何のためにあるのか？

- ・医学的診断名は治療に直結する。 状態の理解から治療・指導に役立つ
 - ・状態像は変化し、重複する。 状態像を把握し、効果のある指導を行う。
 - ・診断名に振り回されず、子どもを見る。 同じ診断名でも子どものニーズは異なる。
- 発達障がいそのものがスペクトラム（連続体）であり、教育だからこそできる支援がある。

見えにくい一次障害、深刻な二次障害

通常の学級での「配慮や支援」の３つのレベル

- （１）一般的に「効果的」と言われる指導
- （２）特別に配慮した指導
- （３）特定の障害種に特化した指導

「ちゃんとする」ってどういう状態？

- ・何が、どうなる状態に、いつまでにするのか、がよくわからない。
- ・だとすれば、「ちゃんとしなさい」という言葉だけでは指導とは呼べない。
- ・やらせてみて「ダメでしょ」は学習ではない。
やる前に、できることか見極めてルールを決める。
- ・できた状態まで確認して、誉めるところまでする。
- ・「できた！」までたどり着けない子も多い。その場合は、途中の励ましが有効。

低緊張が顕著な場合

低緊張 低覚醒 低反応

授業中は「聞くべき音」と「捨てるべき音」の区別が難しい。

音の選択的注意の力が弱いと

- ・雑音も目的音も等価に入力されてしまう。
- ・重要でない音を無視できない。
→集団活動で、あまり集中できないが友だちのからかいや失敗は聞き逃さない。
- ・雑音が多いと途端に聞き取り能力や集中力が落ちる。

指示の4階層 ～教え方を使い分ける～

- (1) 手添え(身体ガイド) 直接手を添えて、動かし方などを教えていく。
- (2) お手本の提示 同時モデリング 一つの工程を区切って示す。
先行モデリング 一連の作業の見本を示す。
- (3) 視覚支援 文字、絵カード、指差し、身振り手振りなど。
- (4) 言語指示 直接的な言語指示 ○○を持ってきて
間接的な言語指示 次は何をするの？

個別の指導計画を作成する際の5ヵ条

- (1) 教師の指導目標ではなく、その子を主語に行動目標を設定すること。
- (2) 肯定的で、具体的な表現の目標にすること。
- (3) 内容・場面をしぼること。
- (4) その子の「つまずきの背景」を踏まえた目標・手立てにすること。
- (5) 「指導計画」という名称に振り回されないように。あくまでも支援が必要な子の生かし方を考えること。

質問の種類と難易度

- A 「はい」「いいえ」で答えられる質問 ex 運動は好きですか？
- B 答えの中から選択肢を選べる質問 ex 国語と算数、どちらが好きですか？
- C 答えが限定できる質問 ex 「いつ」「どこで」「誰と」「何で言われた？」
- D 答えが限定されない質問 ex 「どんなふうに？」「なんでそんなことするの？」

あらためて、特別支援教育とは

今までの指導方法や考え方に見直しに役立てられる教育。

- ・「気持ちのリセット」が必要。
- ・効果的な指導のためには「つまずきの背景に迫る」ことが必要。

子どもは一人ひとりちがいます。

「理解は最大の支援なり！」 何でも許すのではなく、うまくいかなさの背景を知ること。

第Ⅱ章

課題研究

「学年研究」

第 1 学年部会の実践

研究主題	「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし考え伝える力の指導」
対象生徒	産業科１年 R, I
1、 事例の概要 本生徒は入学当初から友達とのトラブルがあり話し合いで解決することが苦手であった。さらに、相手の気持ちが分からず自分の感情のままに思ったことをすぐにしゃべってしまうこともあり、友達に不快感を与えたり傷つけたりで、それがまたトラブルの原因になることもあった。また、学級委員長などを積極的に務めリーダーシップを強く発揮できる反面、友人の意見を聞き取りながら上手く話し合いを進めることができず、意欲が空回りすることも多く見られる。書く力についても、文字を丁寧に書かないため日記などで内容を伝え難いことが多い。 2、 事例の課題 状況を把握し相手の気持ちに配慮した発言や行動がいつでも取れる・・・課題A 友人の意見を聞きながら話し合いを進めることができる。・・・課題B 相手に読みやすいよう丁寧な文字が書ける。・・・課題C 3、 課題への取り組み 「相手の気持ちを考えて話す」・・・課題A 学校ではいつも 25M泳げるのにスイミングスクールだと緊張してしまい進級テストに合格できなくて落ち込んでいる友達にどのような言葉をかけてあげたらよいか。 どんな気持ちか→テストに失敗して悲しくてがっかりした気持ち 言葉掛け→テストには失敗してしまったけど、学校で泳げているんだから大丈夫だ、次のテストでがんばれ！ 作業の掃除中うっかり友人に水をかけられて作業着が汚れてしまいました。どんな気持ちか。 答え いやだ、イラっとすると思う。 「作業着を汚してしまってごめんなさい。今度から周りを見て気をつけます。」と謝ってきた友人に対してなんと答えるか。 答え いいよ、次から周りを見て気をつけてください。 反対に自分が友人の作業着を汚してしまったら相手はどんな気持ちだと思うか。 答え 嫌な気持ち、不快な気持ちにさせてしまったと思う。 不快な気持ちにさせてしまったらどうすればいいか。 答え 「ごめんなさい」、「すみません」と言って謝罪する。 「場面に応じた言い方、丁寧な言い方で話す」・・・課題A 単独で現場実習に行き、いつもと違う作業をまかされやり方の説明を受けたが、やり方が分からなくなった。周りには同じ作業をしている人もいない。 答え 作業中すいません。やっているうちにやり方が分からなくなりました。もう一度教えてください、お願いします。 宿題を寄宿舎に忘れ、取りに行きたい時どのように言うか。 答え 先生すみません。宿題をわすれてしまいました。寄宿舎に取りに行ってもよろしいでしょうか。 職員室の山田先生の机の上にプリントを置いてから帰るように言われました。しかし、山田先生の机の場所が分かりません。どうするか、どのように言うか。 答え 他の先生に山田先生の机の場所を聞く。 お仕事中すみません。山田先生に机の上にプリントを置くように言われたのですが、山田先生の机の場所を教えてください。 作業中、腹痛が我慢できなくなり保健室に行きたい時、どうするか、どのように言うか。 答え 先生にお腹が痛くて保健室に行きたいことを言う 先生お腹が痛くてがまんできないので保健室に行ってもよろしいですか。	

○ H R

「話し合い活動」・・・課題 B

学級目標決めや各行事の時に話し合い活動を設定した。学級委員長として話し合いを上手く進めようと思うが、意欲が空回りすることが多く、自分の意見ばかり言っていた。また、友人が意見を言っている途中で話しはじめてしまい、最後まで聞けないこともあった。このことから、話し合い活動を多く設定し、友人の話を最後までしっかり聞いて話し合いをするよう繰り返し指導をした。

「日記」・・・課題 C

日記を始めた当初は学校や寄宿舎であったことややったことだけを書く短い文章(2、3行)であったことから、学校や寄宿舎であったことだけを書くのではなく、その時に思ったことなどの感情を書くようにさせた。また、行動面で指導された時には、発言や行動によって相手がどのように感じたと思うか、今後どうしていかなければならないのかなどを繰り返し書かせた。

「漢字練習・ひらがな練習」・・・課題 C

文字を雑に書くことは相手に伝わりにくいことを指導し、国語以外でも漢字やひらがなの練習を行った。はじめは、大きなマスで十字リーダー線ありの用紙(小1 漢字練習帳)を使用し徐々にマスが小さい用紙にしていき最終的には日記と同じ横書きにという段階をおった練習をした。

4、成果と残された課題

課題 A

国語では、「相手の気持ちを考えて話す」、「状況を把握して丁寧な言い方で話す」ことを重点に指導してきた。「相手の気持ちを考えて話す」では、具体的な場面設定を行い時間をかけて考えさせると、相手がどのような気持ちなのか、自分がしたことによって相手にどんな気持ちを持たせてしまったかを考えることができた。また、どのような話し方をしたらよいのかも考えることができた。「状況を把握して丁寧な言い方で話す」でも具体的な場面設定を行い時間をかけて考えさせると、話しをする相手の状況把握をすることができ、その状況に合わせた言葉や目上の人に対しての丁寧な言葉遣いを考えることができた。

課題 B

話し合い活動においては、繰り返し「話しを最後まで聞く」指導と、友人から何度もまとめ方についてアドバイスをされたことによって、まだ不十分ではあるが落ち着いて話しを聞き話し合いをまとめることができるようになってきている。

課題 C

日記の活用においては、読む人に伝えることを考えさせ、あったことだけではなく思ったこと感じたことなどを書くよう指導した結果、日記を始めた頃に比べ言葉掛けをしなくてもほぼ毎日感情などを書けるようになった。また、行動面で指導された時には、発言や行動によって相手がどのように感じたと思うか、今後どうしていかなければならないのか等を書かせたことで、話しをして指導したことをより意識付けさせることができ有効だったと考える。また、漢字やひらがなの練習では、段階をおった指導をした結果、文字のバランスに気をつけることができるようになり日記や漢字練習などで丁寧な文字を書くことができるようになってきている。

この研究の取り組みの結果、時間をかけて考えさせると相手の気持ちや状況を考えることができ、それに合わせた言葉を考えたり、丁寧な言葉を使うこともできることがわかった。しかし、とっさに何かが起きた場合や気持ちが高揚している場合には、相手の気持ちや状況を考えることが難しく、相手を不快な気持ちにさせてしまう言葉や行動をとってしまいトラブルになることがまだある。

このことを改善するためには、具体的にいろいろな場面でどのような対応をしたらよいのかということのソーシャルスキルトレーニングの機会を多くつくることと考える。そして、トレーニングを多く経験することでとっさに問題が起きたときでもトラブルを少なくすることができると思う。

研究主題 「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし考え伝える力の指導」

1. 対象生徒の概要

農業科1年 K.K

得意なこと 好きなこと 興味関心の強いこと	・ポケットモンスターが好きで、ゲームや単行本を持っている。 ・日常生活の中で気になったことをインターネット等で調べるのが好き。 ・手先は器用ではないが、細かい作業が好き。 ・パソコンにも興味があり、パソコン部に入部。
苦手なこと 嫌いなこと さげなければいけないこと	・周りのペースに合わせて素早く行動することが苦手で、周囲より遅れてしまうことがある。 ・矢継ぎ早や突然の質問には、言葉が出にくくなり沈黙してしまうことがある。 ・自分の興味や関心のあることを、一方的に他者に話し続けることがある。
身辺自立	・身だしなみを自分から気をつけることが現在の課題。
対人関係	・分からないことや疑問に思ったことを、他者に聞くことができずに自分で判断することがある。
コミュニケーション	・自分の思いがあっても、考え始めると悩んで言葉が出てくるまで時間がかかる。
働く力	・行動が緩慢であり、周りのペースにあわせて行動することが苦手。
生活技能	・時間を意識して行動できるが、行動が緩慢であり予定時間に間に合わないことがある。
諸検査の結果	・IQ74(田中ビネー知能検査 H21.11.13 函館児童相談所にて実施)

*フェイスシートから

本生徒は、上記のとおり他者とコミュニケーションをとることを苦手としている。入学当初は、指導者の問いかけに対しても「別に・・・」「普通です」「五分五分です」「どちらかという・・・」などあいまいな表現で返すことが多かった。時には、問いかけに対して返事をしなかったり、話している相手の顔を見ない事もあった。

また、同級生の問いかけにも答えに困って黙ってしまったり、集団での作業において自分のなすべき事を(とっさに)考えられないため浮いてしまうことが多かった。

2. 事例の課題

日記や作業日誌を書かせているが、コメントの中身は学校でやったことや寄宿舍で何をやったかのみ記載しており、思ったことや感情を書くことがない。これは、国語の作文でも同様であった。このことから、自分の感情を言葉や文字で表現することを苦手としていることがわかった。

また、漠然とした指示に対しては、どうして良いかわからず止まってしまうため、イメージすることや場の状況を把握することを苦手としていることもわかった。例えば全体に対して「後片付けは5分で終わらせるように。お互い状況を見て声を掛け合って手早く片付けること。」と言った指示では動くことができず、他の生徒とコミュニケーションを取りながら作業を進めることが難しい。

このようなことから、対象生徒の「見聞きし、考え伝える力＝コミュニケーション能力」を身に付ける上で、以下の課題をクリアさせていきたいと考えた。

課題	A	言葉や文章で感情を表現することが苦手(うれしかった、楽しかった、残念だった・・・など)。
	B	質問に対する答えは、曖昧な表現を使う場合が多い(はっきりとした答えを自分で出せない。YES・NOの答えをなかなか出せない)。
	C	相手の立場で物事を考えられない(イメージできない)。そのため伝えられないし行動できない。

3. 課題への取り組み

- 日常的な取り組み（日記・作業日誌）

日記や作業日誌のコメントを書く際は、「その時どう思った？」というコメントを書き、次の日に思ったことを簡単に書かせていたが、最近は自分から思ったことを書くように指示し書かせている。

課題

A

- 国語での取り組み

1 学期

教科のねらい	体験したことの感想を文章に書き出し（作文し）、人に伝える力を養う。
--------	-----------------------------------

取り組み	日付	課題
プレテスト	4月16日	
プレテスト解答	4月21日、28日	
「作文の書き方」（水仙ロードレースを例に） * ワークシートを利用し、作文の書き方について学習。	5月12日	A
「遠足の思い出」発表（作文指導は、生単で実施） * 物おじすることなく、大きな声で堂々と発表していた。	5月26日	A ○
「旅行中、飛行機が砂漠の真ん中に墜落したら…」 * 飛行機で旅行中、砂漠の真ん中で墜落したら、あなたはリストの中から何を飛行機から持ち出すか？を考えさせた。指示どおり、リストの中から5つを選択し、持ち出したい理由も簡単に答えられていた。	6月 2日	BC ○
「自分の意見を話す：嫌いな食べ物を残して良いか」 * 「嫌いなら無理して食べなくてよい」「嫌いでも食べるべき」と2つの意見を提示。どちらに賛成か考えさせた。K自身、好き嫌いがあるため答えは前者。ただし、野菜全般とか肉全般とかはいけなないと、自分の意見をしっかりと書けていた。	6月 9日	B ○
「1学期の思い出」(ワークシート作成・下書き・添削・清書～作文) * 下書きの段階では、ほとんどが見たこと・やったこと（事実）の羅列で楽しかったや辛かったといった感情を表現する言葉がなかった。清書で「楽しかったこと」や「大変だったこと」を書くよう指示した。	6月16日～7月6日	A
「1学期の思い出」発表 * 「遠足の思い出」同様、物怖じせずに大きな声で堂々と発表していた。	7月21日	A ○

2 学期

教科のねらい	場の状況を把握する力を身に付けると共に、円滑にコミュニケーションをとれる力を身に付ける。
--------	--

取り組み	日付	課題
「読書感想文」発表		A ○
「こんなときどうする～相手の立場で物事をかんがえてみよう～」 * バスに乗って座っていたら目の前に妊婦さんや足の悪いお年寄りが立った。その時あなたはどうか？を考えさせた。譲るべきことは理解している。しかしその理由は「なんとなくそう思うから」と解答。もし自分が相手の立場だったら…をなかなかイメージできない様子だった。	9月28日	C ▲
「こんなときどうする～相手の立場で物事をかんがえてみよう～」 * クラスで友人二人と遊んでいた、クラスメイトが一人こちらに近づきじっとこちらを見ていた。その子の気持ちと自分ならどう対応するかを考えさせた。「一緒に遊びたいと考えている」「いっしょに遊ぶ？と声をかける」と解答。その場の状況をイメージし、もし自分なら…を考えられていた。しかし、実際にそのように行動するかは疑問。	10月 6日	C
「こんなときどうする～状況に応じた言い方」 * 「消しゴムを貸す場合と借りる場合」「うっかりと牛乳をこぼして友人の服を汚してしまった場合とこぼされた場合」の言い方と態度について考えさせた。「消しゴムを借りる場合」は、「ごめん、消しゴム忘れたんだ。貸してくれる？」とまず、謝る気持ちを表現できていた。	10月13日	ABC ○

「こんなときどうする～状況に応じた言い方」 *「牛乳をこぼして友人の服を汚してしまった場合」では、「ごめんなさい」と言うだけで、では「どう態度で表すか？」（例えば、ハンカチで拭いてあげるなど・・・）というところまでは考えられない様子だった。	10月20日	ABC ▲
「こんなときどうする～トラブルの解決～」 *AさんとBさんは、とても仲良しでしたがあるきっかけでけんかになってしまい話をしなくなった。そのうちAさんには新しい友人ができたが、Bさんは一人で図書館にすることが多くなった。Bさんの気持ちとAさんとBさんがまた仲良くなるためにはどうしたらよいか？を考えさせた。Bさんの気持ちは「さびしい気持ち」、また仲良くするためには・・・「あやまる」とそれぞれ一言のみの解答。場のイメージは持てている様子だが、どう謝るか？どう和解するか？方法が分からないようだった。	10月27日	C ▲
「メモや連絡を書く」	12月 1日	
「メモや連絡を書く」 「伝言ゲーム」	12月 8日	B
「こんなときどうする」おさらいテスト *おさらいテストは、「こんなときどうする？」から、授業で行った事例を中心に出题した。答えは、授業で行ったとおりの解答で書かれていたの、丸暗記した知識である印象が強かった。その状況に置かれたとき、答案のとおりにはできるかは疑問であるが、記憶には残っているようだった。	12月15日	ABC
「YES・NOゲーム（思考力と判断力を養うゲーム）」 *ルール 二人一組に分かれ、質問する人・答える人を決める。質問する人は、「はい」か「いいえ」で答えられる質問をする。答える人は、どんな質問に対しても「はい」か「いいえ」でしか答えてはいけない。 例えば、テーマが「好きな果物」であれば、「それは、丸いですか？」「それは、甘いですか？」「それは、赤いですか？」と言うように「はい」「いいえ」で答えられる質問をしていき相手の好きな果物を考えていく。やりとりする時間も決めて行うため、質問する人は、相手の好きであろう果物をイメージしながら早く的確に質問を考えなくてはならない。質問される人は、相手を待たせることなく、すぐに「はい」「いいえ」の回答をしなくてはならない。	適宜	B

*○→できている、→まあまあできている、▲→あまりできていない

4. 成果

対象生徒の課題や情報を担任を中心に共有することで、国語のみならず生単・作業学習・H R他、様々な場面において指導を行ってきた。

その成果として、以下の点が挙げられる。

課題Aに関して

- 少しずつではあるが、日記や作業日誌で気持ちを表現できるようになってきた。（「～と思いました。」「～ができませんでした。今度から気を付けます。」という表現が増えた。）

課題Bに関して

- 「どちらかという・・・」は使うが、「普通」「五分五分」というどちらでもない表現は使わなくなった。

課題Cに関して

- 「考えても解らないことは質問する」という姿勢が身についてきた。
- 作業学習において、片付けに関して以前と同じ指示の出し方でも、自分でやるべき事を探したり、「手伝います」とクラスメイトの所へ率先して行けるようになってきた。
- 評価から、3つの課題のうち課題Cに関する部分を最も苦手としていることがわかった。

この1年は「見聞きし、考え伝える力」を身に付けていく上での課題をはっきりとさせた1年でもあるので、来年度以降も継続して取り組み「見聞きし、考え伝える力（コミュニケーション能力）」を育成していきたいと思ひます。

研究主題	「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし考え伝える力の指導」
対象生徒	生活家庭科 1 年 D・N

1、事例の概要

本生徒は、生活家庭科の 1 年生である。構音障害を持ち、置き換え、きつ音がある。思ったことを何でも口に出してしまうことがあり、人間関係のトラブルも多い。語いの少なさや表現の稚拙さが問題となっていると考えられる。他者と上手くコミュニケーションを取るためには、どのような言葉を使うのが適切であるかをその都度指導している。

得意なこと 好きなこと 興味関心の深いこと	・スポーツが得意で意欲があるが、ルールがわからないスポーツに対しては、消極的である。 ・テレビのヒーローものが好きで興味・関心が強くそのことに対してとても詳しい。
苦手なこと 嫌いなこと さげなければならぬこと	・短期的な記憶が苦手で聞く指示がほとんど入らない。 ・こだわるほどではないが、自分の誤りを素直に認めることができない。
身辺自立	・おおむね自立しているが、整理整頓が苦手である。 ・自分の持ち物などが乱雑にしまわれている時がある。
対人関係	・自分の気持ちのままに相手のことを考えることなく関わることでトラブルになることが多い。
コミュニケーション	・吃音があるために相手に言葉が伝わらないことある。 ・自分ができないと思うことは、やってみようとししない。
働く力	・意欲はあるが、集中力が続かなかったり、できないことをすぐにあきらめてしまう傾向がある。 ・細かい作業でもできないことはない。
生活技能	・時刻を読むことはできるが、時間をさかのぼって行動と結びつけることができない。
諸検査の結果	IQ49（田中ビネー式検査 本校にて実施）

フェイスシートから

2、事例の課題

国語の教科指導では、「音読」「視写」「漢字の書き取り」を中心に行っている。また、毎日、日記を書くこと、生活単元学習においての行事の作文を書くことの指導を行っている。しかし、日記や作文のように自分の思っていることを書くということは、苦手であり、音と文字が一致しなかったり、漢字をほとんど書かなかったりしている。また、主語がなく、突然「テレビを見ました」「作業をしました」という文章になってしまっている。

本研究主題の「伝える力」というところでは、国語の教科の時間内での本生徒の「書く力」の指導は難しい。また「聞く力」では、作業などでの指示を 2 つ以上覚えるのは、難しく、分からなかったことを指導者に伝えることも難しい。このようなことから、語い力を増やすこと、正しく読むことができること、文字と音が一致することを身につけるための国語の指導をしていかななくてはならないと考える。

課 題	A	「書く力」語い力がないために稚拙な表現や二語文になってしまう。
	B	「伝える力」緊張したり、呼吸がうまくいかないために吃音がでる。
	C	「聞く力」文を覚えたり、要点をまとめて聞くことができない。

3、課題 A・B・C に対しての取り組みから

- A 12月から、HR や学級生単などの隙間の時間に「見たこと作文」～上條晴夫（東北福祉大学準教授）の実践や「お題作文」を行っている。
- B 光村図書「国語 3年上 わかば」から、物語文、説明文、その他に「いまを生きるあなたへ贈る詩～50」より20篇の詩を音読している。
- C 視写をすることで書き写すことの抵抗感をなくし、言っているスピードに合わせてメモを取ることができるようにする。

4、成果

課題 A 「書く力」

観 点	評 価	取り組んだ内容と成果
関心・意欲		大変意欲的に取り組んでおり、分からないことは挙手して教師に訪ねている。日記では、3行以上書くことはないが、200字くらいは、書くことができています。
語い力・言語表現の力		稚拙な言葉が多いが、感情を表す言葉は、豊富である。また、オノマトペを多用することで自分の気持ちを表現している。
構 成 力	○	時間を追って物事を書くことができていた。また、結論や仮定が先にあり、その理由を書くという技法もある程度定着したといえる。

この他に語いを増やすためと漢字を使うことを身に着けるために授業時間の始まりから5分程度を必ず漢字の書き取り練習に充てている。

課題 B 「伝える力」

観 点	評 価	取り組んだ内容と成果
関心・意欲		作文発表や意見発表の時には、積極的に挙手をして言うことができています。また、そのことがいやではなく、むしろ認められたいと思っている。
語い力・言語表現の力		自分が何のことについて話をするかの前おきがない上に、あわてて話をするので、きつ音で内容が聞き取れないことが多い。しかし、音読や暗唱するときには、きつ音、構音障害がでることはなくなった。
構 成 力		話の内容が時間の経過通りではなかったり、振り返ること、見通しを持つことが苦手のままである。指導者側が整理して言い直しをさせることで正しい文章を話すことができています。

課題 C 「聞く力」

観 点	評 価	取り組んだ内容と成果
関心・意欲		聞き取ることができなかったことを挙手して指導者に訪ねることができていた。要点をまとめてメモを取ることを指示する。
語い力・言語表現の力		聞いたことをメモすることが必要と考え、黒板の文字を速く視写する活動を行う。その中で生徒自身が聞いている音と文字にする単語が一致しないことを指摘する。視写している間は、集中することもできている。
構 成 力		要点をまとめることは、かなり難しいと思われる。自分がわかるようにメモを取ることができていないことから、「聞くこと」の内容をまとめることが苦手である。

5 考察

研究主題である「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし、考え伝える力の指導」を3つの観点に分けて考察してみる。一つ目に「見聞きし考える力」二つ目に「伝える力」三つ目に「人間関係を構築するための意欲」である。一つ目、二つ目は、ソーシャルスキルトレーニングの機会を増やし、生徒自身の中にあらゆる場面でのマニュアルができればトラブルを少なくすることができると考えられる。

また、きつ音や構音障害の問題は、このことは、三つ目の「人間関係を構築するための意欲」にも関係してくることではあるが、彼の相手と関わりたいという強い気持ちがそうさせていると考えられる。語い力が明らかに少ないと思われる中で相手に好意を持って、関わっていけることは、とても大切である。

本研究において国語の教科によってできる指導の中で、特筆すべきことは、詩の音読における彼自身の精神的な成長が見られるのではないかということである。音読することで文章の理解が深くなり、文章表現をすることで自分の感情と結びつくようになった。

2月第1週目の国語の授業で「さようなら」という谷川俊太郎の詩を読み聞かせ、追い読み、交互読み、一人読み、一斉読みで10回以上読んだとき、「う～ん」という嘆息に似た声を出した。この事は、高校に入ってから国語の授業の中で初めてのことであった。彼の中で「読むこと」に対する障壁が低くなったと感じる場面であった。言語能力の成長が精神的な成長を後押ししたのではないかと考えられる。

6 参考資料

D・Nの作文～朝、起きたら毛虫になっていた。さあ、どうする？

「今日、朝おきたらぼくは毛虫になってました。ぼくはびっくりしてました。そして外に出たら木の家でした。そしてぼくは、草がいっぱいはえているところに行きました。そしてぼくは、ぼくとおんなじ毛虫がいました。そしてぼくは、そのひとにはなしました。そしてともだちになりました。そしてともだちと学校にいくといろいろな虫がいました。そしてぼくは五人ともだちになりました。その仲間は、かぶとむしと・・・

（ここからは、仲間で敵をやっつけて、蛾になって終わる）」

しかも、ここからは原稿に書いていないことを延々と話し続けることができている。

7 参考文献

谷川俊太郎詩集	谷川俊太郎	ハルキ文庫
いまを生きるあなたへ 50の詩	二瓶信行	東洋館出版社
見たこと作文でふしぎ発見 - たのしい作文の書き方	上條晴夫	ネットワーク双書
楽しい力がつく作文ワーク	野口芳宏	明治図書
吃音のある子どもたちへの指導	青山新吾	明治図書
中学作文ワークシート	石川 晋	学事出版
授業をうーんと面白くする中学国語ミニネタ&コツ	石川 晋	学事出版
小学校国語 3年 わかば		光村図書

第2学年部会の実践

2 第2学年部会の実践

(1) 研究主題

『教科指導』と『領域・教科を合わせた指導』との連携による働く力の育成
～ 基礎的知識・技能を活用する力を育む授業と日常の指導 ～

(2) 研究主題設定の理由

本研究は、昨年度本校の教育課程と指導内容表が改められたことを契機に、教科指導と領域・教科を合わせた指導(以下「合わせた指導」と略す)の在り方について実践をとおして検証し、生徒の社会参加・自立に向けた働く力を育成する教育活動の実現を目指すものである。

昨年度は生徒の課題(実態把握)と指導の課題(授業間の連携や授業内容・方法等)を明らかにした。生徒は基礎的な内容はおおむね理解していても、それを応用する力が不足していることがわかった。一方、生徒の指導は、知識や技術の基礎を主に教科指導で、応用と実践を主に合わせた指導で行っていたということ、しかし互いの連携不足で系統的・効果的な指導が必ずしも十分ではなかったということを明らかにすることができた。このような研究結果から本学年の重点課題について検討を重ねたところ、日常生活において必要な国語・数学的な基礎的知識を身につけ使いこなす力＝『活用する力』を育むことが、働く力(広義には生活する力も含む)を身につけさせることにつながるのではないか、という仮説を立てるに至った。

今年度は数学的要素の指導に着目し、授業実践をはじめ様々な取り組みをとおして、重点課題である『活用する力』を育むことを目指し、本主題・副題を設定した。

(3) 研究の目的

- ・ 日常生活において必要な数学的な基礎的知識を身につけさせた上で、それを活用する力を育む教育を実践し、働く力(生活する力を含む)の定着と向上を図る。

(4) 研究の内容と方法

本研究は3カ年計画で行う計画であり、今年度で2年目にあたる。昨年度の研究発表で提示したとおり、2・3年目においては1年目の研究の結果導き出した重点課題の解決に向けて、教材・教具の開発や効果的な授業を展開できる方法の探求、研究授業等を行う。

今年度は数学に焦点を当てたことで、数学の授業を中心とし、あらゆる場面における指導方法の研究を、以下のような基本的な方向性に沿って進め、4つの取り組みを行った。

～基本的な方向性～

- ・ 昨年度の研究結果、本校の指導内容表を踏まえて研究を進める。
- ・ 数学担当が中心となり、全員で研究を進める。
- ・ まずは、活用する力のもととなる基礎的知識・技能を身につけさせる。
- ・ 授業間の連携や、授業以外の指導場面にも着目する。

～具体的な4つの取り組み～

授業参観の実施(研究授業として行うのではなく、気兼ねなく見合う)

話し合いの実施(自由にアイデアを出しあう、みんなで勉強しあう)

教材・教具の工夫(主に授業担当者間が行う)

研究授業の実施(12月に各学級3回実施)

(5) 研究推進計画

- ・ 6 月 研究の概要決定 計画発表会
- ・ 7 月以降 研究の推進
- ・ 8 月～10 月 授業参観 + 話し合いの実施
- ・ 10 月 中間発表会
- ・ 12 月 公開授業研究の実施
- ・ 1 月 1 年間の研究の整理 次年度の具体的取り組みの検討
- ・ 2 月 研究報告会
- ・ 次年度以降 研究の継続、研究（3 年間）のまとめ

(6) 研究の実際

ア 授業参観 + 話し合い の実施

(8) 資料 の 資料 1 参照

<実施要領>

- ・ 一度に見に行く人は、大人数では生徒の集中力等に影響が出るおそれがあるため、数学の授業を担当している先生 2 名、担当以外の先生 3 名の計 5 名以内を基本とする。
- ・ 参観をしたその日のうちに、軽く話し合いを持つ（翌週月曜などになることもある）。
- ・ 授業内容は、年間指導計画では「容積」「お金と計算」となっているが、各学級の実情等により、その通りになるとは限らない。
- ・ 各学級の MT は、公開が割り当てられた日の指導略案を出す。

<実施状況>

授業日時	公開学級	授 業 内 容	参 観 者		話し合い 日時・場所
			数学担当者	数学担当者以外	
8 / 23(月) 6h	産業科	割合（どちらがお得か、何割引か など）	阿部、岩城		同日・図書室
9 / 6(月) 6h	農業科	容積（単位を知る、内容量を知る など）	福寿、岩城	田中、山柿	同日・休憩室
17(金) 2h	家庭科	A：分数（2 等分・3 等分する） B：10 ずつまとめる、わけ	矢倉	田中、山柿	同日・休憩室
24(金) 2h	産業科	割合（新聞広告を用いて、どのくらいお得か、何割引か）	矢倉、大口		同日・休憩室
10 / 1(金) 2h	家庭科	調理にかかわる単位や数字 （A と B 合同）	福寿	田中、山柿、小林	10 月 4 日 図書室
4(月) 6h	農業科	容積（人数分に分ける、割り切れない数、およその数）	高佐、大口	山柿	同日・図書室

昨年度の数学は、プレテストなどの実態把握材料をもとに、学級枠を超えて 4 グループに分けていた。しかし、学級のスタッフが自学級の生徒を直接指導した方が細かく指導ができてよいのではという話し合い結果から、今年度は学級単位で指導にあたった。また指導者を複数にし、個に応じた指導ができるようにした（ゆえに家庭科内では 2 グループに分かれている）。

数学の授業者にとっては、「見に来ていただいた先生方から助言や質問を受けるなど交流することで、授業者自身が気づかないことに気づかせてもらった」「他学級の授業を見ることで応用・工夫できる点が見つかった」といった成果があった。学級の指導者枠・授業の担当枠を超えて授業を参観し合い、授業の感想など簡単でもいいので話し合いを積み重ねていくことで、指導者としてのスキルアップや、教材・教具の工夫へとつなげることができた。

一方「特に MT が参観に行く場合には授業展開の工夫が大変である」「誰かが見に来るといって落ち着かない状態が続く」といった課題があった。取り組み自体はよく、継続していくことが望ましいが、その実施方法については今後さらに検討の余地がある。

イ 公開研究授業の実施

(8) 資料 の 資料 2 参照

<実施要領>

- ・ 11 月は学校祭特別日課のため、12 月に行う。
- ・ 「授業参観」「話し合い」の延長線上の取り組みと捉え、他学年の先生方にも授業参観していただき、ご意見・アドバイスを伺う機会として設ける。1 回につき 1 学級じっくり見てもらえるよう、12 月の授業回数計 3 回とも全学級公開する。人数制限等は設けない。
- ・ 3 回とも、学級ごとに反省会を開く（できればその日のうち、遅くとも次の授業前まで）。
- ・ 各学級の授業担当者は、12 月のおおまかな授業予定を立てる。計画では「重さ」となっているが、前時までの流れも考慮の上、計画を立てる。
- ・ 各学級の授業担当者は、授業 3 回とも指導略案を出す。この負担や 10 月までの積み重ねがあるため、いわゆる“授業研”で用意するような資料（何枚にも及ぶ学習指導案）は作成せず、簡略化した代替資料を作成し、12 月 3 日より前に配布する。

<実施状況>

授業日 (2 校時)	授 業 内 容 と 教 室		
	産 業 科	農 業 科	生 活 家 庭 科
12 月 3 日 (金)	重さの単位 (g、kg、mg など何に使われるか、肉・米・葉などを例にして) 単位の変換 【産業科 2 年教室】	重さとかさ (容積) ～ 飲み物の重さと内容量 【農業科 2 年教室】	A : お金の計算 (会計金額の計算) 【家庭科 2 年教室】 B : お金の弁別 【生徒会室】
12 月 10 日 (金)	単位の変換 単位が違う物の加減乗除 平均 (2 つの重さの平均など) 【産業科 2 年教室】	重さとかさ (容積) ～ 重さの単位関係と計算 【農業科 2 年教室】	A : お金の計算 (予算内での買物) 【家庭科 2 年教室】 B : 調べ学習 (物の値段を調べに行く) 【校外学習】
12 月 17 日 (金)	平均 (3 つ 4 つと増やして) 平均の使われている所、 利用について (重さ、金額、個数など) 【産業科 2 年教室】	重さとかさ (容積) ～ 同じ容積の重さの比較 【農業科 2 年教室】	A : お金の計算 (単価の求め方) 【家庭科 2 年教室】 B : 調べ学習のまとめ 【生徒会室】

この取り組みをとおして、授業者にとっては「連続性があり、かつ指導効果のある授業・指導について改めて考え直し、組み立てていくことができた」「生徒の実態を改めて捉え直し、内容を充実できるよう努力できた」といった成果があった。また、授業者以外の先生方からも「先の授業参観と同様、各学科の実態や取り組みがよくわかり、大変参考になった」「勉強になった、こういう機会がたくさんあるとうれしい」といった意見をいただき、指導する側の意識面にもよい効果があったものと思われる。

一方、多くの他学年の先生方に普段の授業を見てもらうため、毎週金曜 2 校時・計 3 回を公開としたが、参観者が予想より少ない学級・参観者がいない学級があった。また、1 回につき 1 学級ではなく、3 学級ともまとめて見に来られる先生も多くいた。これらは、授業を抜けて見に来ることの困難さ、3 回とも同じ時間だと空き時間の先生が限られてしまっていることなどが原因として考えられる。本学年・他学年の先生方双方にとって実りある機会となるよう、今後広くご意見をいただきながら、よりよい実施方法について検討していきたい。

(7) 成果と課題 ~この 1 年、数学と他の指導場面の連携を通じて~

ア 成果（生徒に表れた成果）

< 基礎的な力の定着 >

数学の計量の学習では、調理や作業学習で行う計量と同じ教材・教具を使用し、実際に使用する場面を想定して実際に操作する活動を取り入れる授業展開にした。そして調理や作業では、数学で行ったとおりに計量する場面を意図的に設けた。こうした授業間の連携（題材や指導内容・方法をリンクさせること）のほか、身近な題材を取り上げたこともあり、目盛りや単位が読めるようになった生徒がいた。

< 実際場面での活用・応用 >

数学で学んだ知識・技術を、作業や現場実習において活用できた生徒がいた。具体的には、はかりを用いた計量を行う際、目盛りをゼロにする操作をしたり、器の重さを差し引いて計算するなど、数学で行ったとおりに行うことができていた。また、四則計算や単位の換算など数学で学んだ方法を用いて、作業において 1 リットルに対して 15 グラム必要な肥料を 3 リットル分用意することができた、現場実習ではかりの種類やはかるものが違っても計量できたなど、知識を応用することができた生徒もいた。

一方、調理学習や配膳の場面において、「 $\circ$ 分の 1」という表記や言葉から授業を思い出して実践しようとする生徒もいた。結局知識・技能の活用がうまくできたわけではないが、実際場面において授業内容を思い出し、活用しようとしたその意欲を評価したい。

イ 課題（生徒に残っている課題と、それに対する今後の指導・支援）

< 基礎的な力の未定着 >

基礎知識の定着に時間がかかる場合がある。時間が経つと忘れていたり、なかなか覚えられない生徒がいる。あるいは、数的な概念の形成から促進しなければならない場合もある。これらは生徒の障害の状態にもよるが、指導者は生徒の学習意欲を引き出し、理解を促すこ

とができるような授業の工夫を継続していく必要がある。例えば、視覚的教材や具体物の使用といった工夫が求められる。

<活用する力の未定着>

アでも述べたように、授業内容を思い出して活用しようとした生徒もいたが、結局うまく活用できなかった。数学の授業ではできたが、場面が変わるとできなかった、というケースである。学んだ知識を活用できるようになるには、個人差もあるが場数を踏まなければならない。そのためには、より効果的な授業間連携が必要である。例えば、数学の授業以外の場面において意図的に実践場数を多く設けてもらう、数学の授業内容を作業担当者にも伝えておくなど、授業前に実態と指導方法の共通理解をさらに充実させておくといわれる。

<数学的な力以外の影響>

実践場面ではできていることが、プリント問題など机上学習になると間違える、といったケースがあった。これには、問題文や口頭での出題を理解する国語的な力が不足しているからという場合、机上学習に意欲がない場合、その生徒の得意とする理解のプロセスが“実践で覚える”タイプだからという場合など、様々な原因が考えられる。これらの原因を明確にし、個々に対応していく必要がある。また、“実践で覚える”タイプだからという場合は本研究の道筋の逆を行くパターンであるが、それを否定することはしない。

ウ まとめ・次年度からの研究

上記のア・イから、基本的には“基礎は教科、応用は合わせた指導”だが、必ずしもそうではなく交互に繰り返し積み重ねていくことで、力が形成されていく様子が見られた。

まとめると、本学年の生徒は

基礎的な知識を身につけ、活用する力を伸ばす学習を積み重ねることで、働く力を向上させていくことができてきた と言える。

今年度は数学に重点を当てて「授業参観＋話し合い」と「公開授業研究」、そして本研究の主題でもあり昨年度から意識的に行っている「教科指導と合わせた指導との連携」に取り組んだ。取り組みのなかで指導者は話し合いを重ね、生徒の実態を具体的に把握することができ、数学以外の指導場面においても実態把握を踏まえ、工夫して指導にあたることができた。しかし、話し合いに参加できなかった指導者にとっては、これができない場合もあった。話し合いの内容を伝え、授業前に実態と指導方法の共通理解を図っておくなど、よりきめ細かな連携も必要であることを実感することができた。

まとめると、研究をとおして**指導者**は、

指導上の課題を見だし、解決に向けて努力を重ねるサイクルを形成していくことができてきた と言える。

よって、今後はこうした成果をさらに確固たるものにしていくべく、研究内容や実施方法を再検討しながら、研究を継続する。

また来年度は、昨年度新設されたもうひとつの教科である国語に重点を当て、今年度のような具体的な実践を行う。研究の副題を「基礎的知識・技能を活用する力を育む授業と日常の指導」と題し、3年間に渡る本研究を総括する作業に取り組んでいく。

ところで、新設された国語・数学の指導を1年次から行っている本学年としては、3年間の学習で知識・技術をしっかり身につけられるよう、効果的あるいは系統的な指導を展開することを目指している。その土台となる部分には『学習指導要領』や、昨年度本校のプロジェクト研究で取りまとめた『指導内容表』がある。本学年の生徒の実態を踏まえた上で、この2つのなかから授業で取り上げる内容を抽出し、年間指導計画を立て、指導を行っている。生徒の実態は学年内でも様々であり、年度によっても異なるため、本校では『いつ、何を、どのような題材を用いて、どのように教えるか』を詳細に明記したものは存在しない。しかし、本研究を進めていくなかで“おおよその基本線(柱)”は整理して明確にするべきであるという意見もあった。

本研究からも読み取れるように、教科指導・合わせた指導はそれぞれ独立した指導として完結し得るものではなく、相互の連携が不可欠である。今後、この「教科指導と合わせた指導との連携」については、本研究にとどまらず全校的な課題として取り上げることが望ましいと思われる。

(8) 資料

資料1 授業参観 + 話し合い 取り組みの様子

一例として、産業科と農業科が作成した資料を掲載します。略案の様式は3学級統一していません。授業後の話し合いは職員室の片隅などできる所で数分～小一時間実施しました。2回の参観を終えて、まとめを作成しました。このまとめの様式は、3学級で統一しました。

～産業科 とある日の略案～

数学科	日時 8月 2 3日 M 6 h	産業科 2 年生 9 人	指導者 T1 高佐 T2 福寿	場所 産業科 2 年
	学習内容 「割合 % の活用」	本時の全体目標 割合・パーセントの大まかな仕組みが分かり活用する		
時程	学習内容		指導者の動き	留意点・準備物など
13:45 導入	集合・あいさつ 宿題の答え合わせを朝の学習で行うことを説明する。 一学期の学習を振り返る。 今後の学習予定を知る。割合を続けることを知る。		日直に指示あいさつをさせる ファイルなどで振り返らせる。	
13:50 展開	問題を見て解き方を考える。 → 皿が 180 枚あります。3 時間授業の時に 60 枚釉薬がけをすることができました。何%進んだでしょうか。残りの皿に釉薬をかけるためには後何日かかるでしょうか。		問題を板書する	正解している生徒を選ぶ。
14:05	類似問題のプリント学習をする。 回転寿司で 1 時間 40 皿食べると無料になります。 20 分で 12 皿食べました。何%。40 皿何分。 1 日仕事をすると 3200 円もらえる工場があります。		プリントを配布して取り組ませる。 机間巡視をして困っている生徒の援助をする。	
14:15	2000 円もらいました。何%。何時間。 CD を買いに行ったら 30%OFF の日でした。2800 円の AKB の CD はいくらになるのでしょうか。 350ml のコーラが 30%増量でした。500ml のコーラもバーゲンで同じ値段でした。どちらがお得でしょうか。 答え合わせをする。 生徒を指名してとさせる。		時間を見ながら指名する生徒を考える。 時間がなければ T1 による回答で進める。	
14:25	本時のまとめ			
14:30	時事の予告をして終わる。 終わりのあいさつ			

授業参観 + 話し合い 取り組みのまとめ（産業科）

日 時	1 回目（授業日：8 月 23 日 6 校時）	2 回目（授業日：9 月 24 日 2 校時）
指導内容 （題材や教材）	「割合 % の活用」	広告の割引はどのくらいか
Plan（計画） どのような授業 づくりをしたか	色々な場面やパターンから割合やパーセントが生活や仕事のヒントになったり活用することができるようになると活動に見通しが持てたり計画的に活動できたりすると思われるので設定した。	実際の広告を使って割引や何パーセント OFF などを計算するとどんな感じになるか試して買い物にまつわる色々なことを学ぶように設定した。
Do（実行） 授業をやってみて どうだったか	夏休み明けすぐということもあり、忘れてしまっていてそれまでできていたこともできなかったり、確認や復習に時間を取られ進まなかった。理解できない生徒が多く授業としては不備であった。	きれいに割り切れないことや四捨五入してあることなど数学に関することだけではなく、詐欺やまがい物などについても触れることができた。ゲームや携帯など興味を引く物にしたかったがタイミング良く広告が入らなかった。
See（評価） 反省や話し合いで 出た意見は	前回の授業と間が開いていたので発展形としての授業は難しかった。 昨年のグループで低いグループに居た二人にとっては特に難しかった。 抽象的で分かりづらかったので絵を描いてわかりやすく説明すると良い。	電卓を使わせても良かったのでは。 大まかな数に直していただきたいの計算にする方がよいのでは。 割り算の桁を先に削ってやった方がよいのでは。 生徒を前に出させて計算させては。
Act（改善） 次の授業にむけて 改善や工夫	もう一度わかりやすく説明してから問題に入る。 午後の座学はどうしても集中力が欠けてしまう。まして 6 校時という時間では興味関心を引きつける工夫が必要である。	ゲームとか好きそうな物でやる方がよいのでは。 スーパーとかでも 3 割引のシールなどがあるのでその計算をしては。

この取り組みの成果

・見に来ていただいた先生にアドバイスをもらったり疑問点を聞かれたりと交流することによって、自分では気づけなくなっていたことに気付かせてもらったりする事が多かった。他の学級で行った内容を自分のクラスでもやってみることによってアプローチの仕方や生徒の実態など考えることが多くあった。

この取り組みの課題

・T1 が他のクラスを見に行くときには自分のクラスの授業の準備などもあり煩わしい。見に行くか見に来るかという状態が続いて平常な授業がしばらく無かった。

～農業科 とある日の略案～

題材名	容積 6	学習日時	平成 22 年 10 月 4 日 (月) 6 校時 F、S 欠		
学習集団	2 学年農業科 7 名	学習場所	農業科 2 年教室	指導者	阿部・矢倉
目標	割りきれない数とおよその数(量)を知る。 ペットボトルの飲み物を決められた人数分に分けることができる。				
予定時刻	学習項目	学習活動	留意点・教材教具等		
13:45	集合・挨拶	・あいさつをする。			
	前時の復習	・水をはかる単位や食器に入る量を思い出し、発表。			
	人数分にわけろ。	・500ml の水を目分量で 3 人にわけろ。 ・それぞれの量を計量カップではかり発表。 ・500ml の飲み物を 3 人でわけろ式を考え、計算機で計算し、発表。 166,66666 ・小数点の所の単位が ml(cc)であることを知る。 ・およその量を決めて、計量する。 ・残りの量を計算し、目分量で均等にする。	・グループで相談して行ろ。 - A Is、Ic、It - B S、M ・160ml を計り、残す。 (165ml)(150ml) ・残りを目分量で配る。 ・計量カップの使い方を確認。		
	まとめ 次時の内容 後始末	・計算の必要性と計算で割り切れない場合の処理の仕方を確認。 ・必要量を買う場合の計算を学習する。 ・飲み物を各自飲み、後始末を行ろ。			
14:20					

授業参観 + 話し合い 取り組みのまとめ（農業科）

日 時	1 回目（授業日：9 月 6 日 6 校時）	2 回目（授業日：1 0 月 4 日 6 校時）
指導内容 （題材や教材）	容積 ・ペットボトルの容量を調べ、少ない順に並べる ・容量の単位を調べる	容積 ・割り切れない数と、およその数を知る ・500mlの飲み物を3人分に分ける
Plan（計画） どのような授業 づくりをしたか	・日常飲んでいるペットボトルの容量を実際に確かめることで、単位を覚えられるのではないかと仮定し、計画した。 ・6校時ということで、動きのある活動を取り入れた。	・計量の仕方は前時までで身につけてきた。また、“○○ccをコップに入れるとこのくらい”というように、適量とはどれくらいなのかもわかってきた。 ・次のステップとして、このほかに実生活にかかわる題材として、適量を目分量で作ること、計算も交えて等分することを計画した。
Do（実行） 授業をやってみて どうだったか	・最初に容量と数字、単位を伝えるため、予定よりスムーズに調べることができた。 ・しかし容量の意味を説明しなかったため、ただ表示を写している感じになったのがミスだった。 ・生徒の理解度に差があり、STが個別対応した。	・計る活動はスムーズにできるようになった。 ・三等分に時間がかかった。目分量がうまくいかず元に戻したり、割り算をすることがわからなかったり、割り切れない計算でつまづいたり…。
See（評価） 反省や話し合いで 出た意見は	・具体物を使うことで、興味を持って学習していたのでよかった。しかし具体物の数や種類などは工夫が必要だった。 ・単位の換算は、理解度からすると時期尚早であり、まずは表示に興味を持たせることが必要である。 ・調べた容量の確認場面と、ボトルを並べさせて多い少ないを確認する場面を分けるなど、展開を整理するといよい。	・一人一人のわからない部分がはっきり見えた。それをどう解決していくか考える必要がある。 ・飲み物を分けることと、計算することの結びつきが弱かった。 ・計算ができて細かい部分にこだわって、時間がかかっていた。作業では必要なことだが、今回は…というさじ加減をうまく伝えることが難しい。 ・実習で参加できない生徒がいるので、授業の組み立てが難しい。
Act（改善） 次の授業にむけて 改善や工夫	・単位については今後も繰り返し復習・指導する。 ・計量カップを使って、実際に計らせる。 ・授業展開の“区切り”に留意する。	・次回は計算問題に焦点を当てる必要がある。また宿題でも取り入れて指導していく。問題は割り切れるものなど、簡単なものから取り組ませる。 ・容積の単位や計測はある程度理解した。単位換算や本題材を用いた計算は12月以降とする。 ・同じことを繰り返し指導していく。

この取り組みの成果

- ・他の授業を見ること、自らの授業に助言をもらうことで、授業づくりの一助となった。

この取り組みの課題

- ・具体的な授業改善を行うのは、結局担当者。
- ・次の参観日まで“空き”がある。助言するにもされるにも、何回か続けた方がよい。

資料2 公開授業研究 取り組みの様子

一例として、生活家庭科が作成した資料を掲載します。この取り組みは、授業参観+話し合いの取り組みの延長として、気軽に見に来てもらえるよう工夫しました。その結果、いわゆる“授業研”ではないので、「学習指導案」は作成せず、以下のような資料で代替することにしました。これを最初に配布し、授業ごとに略案を配布しました。なお、以下に掲載した資料はすべて3学級統一した様式で作成しました。

～生活家庭科 公開授業研究 事前資料～

2 学年公開授業研究 資料

生活家庭科

授業者：大口、岩城、藤倉、水野

1 生徒の実態と題材設定理由

- ・生徒の実態は、10個程度の具体物をおおむね間違えずに数えることができる生徒から、加減乗除や時間の計算ができ定規やはかりを使うことができる生徒まで様々である。そのため今年度は、学級内で2つのグループにわけ学習を行っている（昨年度は4グループ）。
- ・Aグループ内6名のうち、初歩的な加減算で指を使う生徒が4名おり、繰り上がりや繰り下がりやの計算を苦手としている。買い物については、日常的に一人で買い物をする生徒は1名である。他は一人で買い物の経験がほとんど無い生徒が1名、残りの4名については1000円以内程度の簡単なお使いやジュースなどの買い物はできる。
- ・Aグループの生徒は、毎日の宿題で簡単な計算問題を行っている。機械的な計算問題はできるが、文章問題、応用問題は一人で取り組むことが苦手な生徒が多い。
- ・Aグループの題材として今回は買い物学習・お金の計算を取り上げる。買い物に必要な計算式の立て方の基本を理解させることを目標に行い、計算自体は、計算機を使って行う。
- ・Bグループの2名の実態は、数の集合については10のまとまりを数唱しながら数えることができる。現在は数の合成を学習中である。加法については、1桁同士の繰り上がりのない計算を一人でできる生徒が1名、具体物を使いながら教師の手ほどきを受けて計算できる生徒が1名である。金銭の弁別については、手本を見て、1円～500円硬貨と1000円～10000円紙幣をマッチングできる生徒が1名、もう一名は100円硬貨をマッチングすることができる。両名とも、広告などに書かれた100円の文字を読むことができる。
- ・Bグループにおける学習の進み方は、教師の説明を聞き、手本を見た後、それぞれ個別の学習活動に取り組んでいる。教師の助言や手ほどきを受けることで正解にたどり着くことができる。
- ・Bグループの題材として今回は日用品や興味のあるモノの値段の調べ活動とお金の計算をとりあげる。それぞれの生徒が1000円未満の値段を見て、100円硬貨が何枚必要か答えることを目標に行う。必要に応じて教師の助言や手ほどきを行っていく。実際の商品を見て価格を読み取らせたいため、校外学習を計画している。
- ・12月15日の学級生単で学級忘年会を予定している。その際に必要なお菓子や飲み物等の購入計画や実際の買い物学習と関連させながら、学習を進めていく。

2 生徒の目標と手立て（後期 個別の指導計画・数学より）

生徒	目 標	手 立 て
I	・学習したことを生活に役立てることができる。	・日常生活に生かすことのできるような学習内容の精選。できるだけ日常生活に近い設定での課題を多くこなせるようにする。
O	・金額の大小が分かる。時間の換算が分かる	・プリント学習で繰り返しの計算練習を行い、筆算の仕方を身につける。
Kn	・日常生活に必要な計算や計測の能力を高める。	・学習内容の精選。繰り返しの学習。実践的な学習内容の設定。
Ki	・お金の種類を理解し、計算をすることができる。	・具体物を用い、硬貨の種類を覚えながら計算させる。
Ku	・日常生活に必要な計算や計測の能力を高める。	・繰り返しの学習。具体物の操作。日常生活に即した学習内容の工夫。
N	・学習したことを生活に生かすことができる。	・生活に必要な計算や計測、金銭、時間などの学習を中心に、具体的な物の操作を行いながら、生活場面に学習を行う。
YY	・日常生活に必要な計算や測量などの基礎的な能力を高める。	・繰り返しの学習。具体物の操作。日常生活に即した学習内容の工夫。
YI	・学習活動に関する時刻を読み取ることができる。 ・硬貨の弁別と簡単なお金の計算ができる。	・教科外の学習種でも時刻を読ませる指導を続ける。・具材を使って弁別を行わせたり、値と硬貨のマッチングを行わせていく。

3 指導計画

- 第1回 12月 3日： A お金の計算（合計金額の計算）
B お金の弁別（特に硬貨）調べ学習で調べるモノを決める
- 第2回 12月10日： A お金の計算（予算内での買い物）
B モノの値段の調べ活動 校外学習
- 第3回 12月17日： A お金の計算（単価の求め方）
B お金の弁別（調べたモノの値段とのマッチング）

4 学習教材

- ・Aグループ
飲み物・おやつ値段表 事前に生徒から飲み物やおやつ希望を聞き、値段表を作成。
レシート 実際に買い物したレシート
- ・Bグループ 模擬貨幣、写真、算数セット、プリント

数学 公開授業研究 学習指導略案

生活家庭科

単元・題材名	お金の計算（買い物学習のまとめ）	生徒	生活家庭科2年Aグループ 生徒6名
		場所	生活家庭科2年教室
日時	平成22年12月17日(金)2校時	指導者	T1:大口香織
単元の全体目標	○ 買い物に必要な基本的な計算式の立て方を理解する。		
本時の目標	○ レシートから必要な情報を読み取ることができる。 ○ 買い物に関する計算式の立て方がわかる。		

学習内容	学習活動	教材・教具	留意点
1 あいさつ	・ 日直の号令であいさつをする。		
2 本時の学習内容の確認	・ 前時までの学習内容の確認と本時の学習内容について知る。		・ 電卓を持っているか確認する。 ・ 前時までの学習内容について質問を交えながら簡単に振り返る。
3 レシートから必要な情報を読み取る	・ レシートのコピーを見て、買い物した日や店の名前、買ったものの名前、使った金額を読み取り、プリントに記入する。 ・ 2枚のレシートの合計金額を計算する(足し算)。 ・ 予算内で買い物をすることができたか確認する。 ・ 残金を計算する(引き算)。	・ レシート ・ 電卓 ・ プリント	・ レシートの見方がわからない生徒には適宜ヒントを与え、自分で答えを見つけ出せるようにする。 ・ 足し算、引き算の立式の方法について、理解できているか確認する。
4 割り算を使って一人あたりの単価を求める。	・ 合計金額から割り算を使って一人あたりにかかった金額を求める方法を知る。 ・ 「割り勘」という言葉について知る。 ・ 割り勘を使った練習問題を解く。 ・ 基本問題を終えることができたら、チャレンジ問題を解く。	・ 電卓 ・ プリント	・ 前々時の学習(一人当たりの予算から全体の予算を求めた)と関連付けながら、立式の方法について説明する。 ・ どのような場合に「割り勘」を使うのか、具体的な例を挙げながら説明する。 ・ 基本問題が速くできた生徒には、随時チャレンジ問題のプリントを渡し取り組ませる。
5 本時のまとめ・次時の予定	・ 本時の学習内容について振り返る。 ・ 次時は3学期。		
6 あいさつ	・ 日直の号令で挨拶する。 ・ プリントをファイルに綴じる。	・ 数学ファイル	

【生徒の目標と手立て（本単元・本時）】

生徒	本単元の目標	本時の目標（上段）と手立て（下段）	評価
I	・買い物に必要な基本的な計算式の立て方を理解する。	・プリント問題の出題の意図を理解し、立式することができる。 ・問題の意味が理解できていないときには具体例を挙げるなどわかりやすく説明する。	
O	・買い物に必要な加減算の仕組みがわかる。	・レシートから必要な情報を見つけることができる。 ・一人で見つけるのが難しいときは、知りたい情報を見つけやすいよう蛍光ペンなどで印をつける。	
Ka	・買い物に必要な基本的な計算式の立て方を理解する。	・プリント問題の出題の意図を理解し、立式することができる。 ・問題の意味が理解できていないときには具体例を挙げるなどわかりやすく説明する。	
Ku	・買い物に必要な加減算の仕組みがわかる。	・レシートから必要な情報を見つけることができる。 ・一人で見つけるのが難しいときは、知りたい情報を見つけやすいよう蛍光ペンなどで印をつける。	
N	・買い物に必要な基本的な計算式の立て方を理解する。	・プリント問題の出題の意図を理解し、立式することができる。 ・問題の意味が理解できていないときには具体例を挙げるなどわかりやすく説明する。	
YY	・買い物に必要な加減算の仕組みがわかる。	・レシートから必要な情報を見つけることができる。 ・一人で見つけるのが難しいときは、知りたい情報を見つけやすいよう蛍光ペンなどで印をつける。	

8名の学級だが、2名はBグループで学習している。

～生活家庭科 略案の授業日の反省記録～

公開授業研究 反省記録

授業日時	12月17日(金)	学 級 (授業者)	生活家庭科Aグループ (大口)
授業内容	お金の学習（買い物学習のまとめ）		
意見・改善点など	・「割り勘」について知らない生徒も多く、ピンとはきていなかった様子もあったが、「将来、必要になること」「知っておいた方がよいこと」として取り上げていたのは良かった。ただ、それほど使う機会は多くは無いかもしれない。また、飲食店によっては、お店の人に頼むと、一人分の金額の計算もしてもらえることも、あわせて知らせておく良かった。 ・全員が電卓を使っの計算をすることができていた。将来的にも必要なことなので良いと思った。 ・残金の計算をする際、5人は「予算 - 合計金額」の計算をしていたが、Kaさん一人だけが、「おつり + おつり」（レシート2枚）の計算をしていた。そのことを、指導者が気づき、みんなの前に出て発表させたことで、本人もすごくうれしそう（自信がついた様子）だった。 ・「予算」について前々回の授業でも説明したが、今回確認したところ、ほとんどの生徒が覚えていなかった・・・残念。もう少し説明方法などに工夫が必要なのかも。		

第3学年部会の実践

1 研究主題

「社会生活における人とのかかわり方を身に付けるための支援のあり方」

～自分の意思を言葉で相手に伝えることができるようになる～

2 対象生徒（研究主題に関する実態）

- ・ 3 学年 生活家庭科：A 君
- ・ 主たる障害：知的障害
- ・ 人との関わりは、対大人・指導者が中心で生徒同士の関わりは少ない。
- ・ 地域環境等（小・中学校が小規模校）から、同世代の人と関わる経験が少なく、人との関わりの基礎が身に付いていない。
- ・ 幼少の頃から表出言語が少なく、地域の関係機関での療育や就学後も継続して言葉の指導を受けていた。
- ・ 学習時など困った時に自分から指導者に聞くことができない。
- ・ 発音が少々不明瞭である。
- ・ 本校入学前の H19.4.24 実施の S - M 社会能力検査では、「意思交換」が他の領域に比べて低い。

3 研究主題設定の理由

A 君の事例研究も今年で 3 年目となる。昨年度は「人との関わり方の基礎を身につけるための支援のあり方」を研究主題として取り組んだ。今年度も研究主題とその設定理由は昨年度から変更はない。過去 2 年間の追試・発展型として、また、3 年間の集大成として本研究を位置づけ進めていきたい。

4 昨年度の成果と課題

（１）昨年度の成果

- ア 報告など決められた場面では、自分からできるようになってきた。
- イ 相手の顔を見たり名前を言ったりコミュニケーション態度での成長が見られた。
- ウ 研究の指導対象場面以外でも成果が見られた。

（２）昨年の課題

成果（ア）～（ウ）が「どんな時でも」「どんな場面でも」「どんな人にも」できるようになることが課題として挙げられた。（→「般化」）

5 今年度の研究内容与方法

（１）研究の仮説

- ア 他の領域・教科や寄宿舍とも連携し、繰り返し、継続した指導を行うことで、報告・質問・人とのかかわりなどが、「どんな時でも」「どんな場所でも」「どんな人にも」できるようになるのではないかと。
- イ 成功体験を積むことで更なる意欲付けとなり、コミュニケーションマインドが育つことで自分から進んで人とかかわるようになるのではないかと。

(2) 研究内容・方法

ア 般化できるようにする。

(ア) 繰り返し継続した指導

- ・昨年度の研究から引き続き、ソーシャルスキルの側面からのアプローチ、コミュニケーション態度の育成、人とかかわりを楽しむという側面からのアプローチ、発声・発語の側面からのアプローチを行う。

(イ) 他の領域・教科や寄宿舍との連携した取り組み

- ・指導内容、目標、手立てなどについて共通理解を図り、記録をとる。

(ウ) コミュニケーション態度の指導でロールプレイして学習したことを、他の学習や日常生活場面にフィードバックしていく。

- ・作業学習での掃除点検で「相手の顔を見る」「名前を呼ぶ」ということを学習し、保健体育でのペア作りの時にいかせるようにするなど様々な場面を設定する。

(エ) 日常生活場面でのかかわり、様々な活動の体験を大切にする。

- ・日常生活場面で意図的にたくさんに人とかかわることができるように場面を設定する。部活動の大会や、地域の活動への参加を促す。自分の好きなものへの取り組みを大事にし、発表できる場を設ける。

イ 成功体験を積む。自信と更なる意欲付け。コミュニケーションマインドを育てる。

(ア) 質問に対する答えの選択肢を与え、自分で考えて答えることができたという気持ちを育てる。

- ・文章を考える際に気持ちを表す言葉で選択肢を設け、自分の気持ちに一番近いものを自分で選ぶ。会話中に質問に対する返事がなかなかできない時は、選択肢を与え、スムーズに会話ができるようにする。

(イ) 質問・報告・相談・伝言などができたら、賞賛する。

- ・作業学習での報告・質問が定着してきたので、作業学習の場面以外でもできた場合は賞賛する。

(ウ) 友人とかかわる場面を意図的に設定し、「楽しい」「話したい」という気持ちを育てる。

- ・学級生単でレクを行う場面を多く設定する。給食の座席を生徒同士が隣になるように工夫し、できるだけかかわる場面を増やす。

6 研究の経過

(1) 般化できるようにする。

ア 繰り返し継続した指導

(ア) ソーシャルスキルの側面からのアプローチ

a 基本的な指導の手立て

- (a) 適切な方法でできた時は、賞賛する。「フィードバック」
- (b) 待つ
- (c) 言葉でさりげなく促す。
- (d) できない時や適切な方法でできなかった時は、指導者が見本を示し、その後に行う。
「モデリング」「リハーサル」

b 指導の実際

月日	様子・場面（本人と指導者・友達とかかわりの様子）考察・検証	手立て
4 / 2 3	（寄宿舍） 洗濯機の蓋を強く閉めたため、「壊れるよ」と声をかけたところ、顔色が変わり、その後シンクを叩いて出て行く。指導者と目を合わせないように逃げるため、夕食後落ち着いて	(d)

	から話すと、歓迎会の準備で疲れたと話した。疲れたら「疲れました」と話をしようと指導した。	
5 / 1 1	(生活単元学習) クラスメイトに「本を貸して」と言われるが、まだ自分が見ているため何も言えずに反応しない。無視しているように思われてしまうため、「まだ見ているから、ちょっと待ってね」と言うよう指導した。	(d)
5 / 2 8	(プール掃除) プールの清掃後、「後で靴下をはきなさい」と指導者に言われる。聞こえているにも関わらずその場で履き、両足を汚す。話が聞こえているならば、その通りに行くよう指導した。	(d)
6 / 7	(給食) クラスメイトに「何見てるの?」と聞かれても答えない。答えないと無視をしているように見えてしまうこと、聞かれたらすぐに答えることを指導した。	(d)
6 / 1 6	(体育) ペアを作る時に、いつもペアになっているクラスメイトを見ながら「これしかない」と言っている。「一緒にやろう」と声をかけるんだよ、と伝えるとその場で言うことができた。	(d)
6 / 2 4	(朝の会) 学級スタッフが「朝の会へ遅れるから、先に始めて下さい」と担任へ伝えるよう頼むが言えなかった。話をすると担任を呼んだが気づいてもらえなかったと言うので、話しかけるときは相手が気づくように呼ばなければならないことを指導した。	(d)
7 / 5	(学級生単) 体育祭のビデオを見るために、ブルーレイの取り付けを数名で手伝うが、一人で行おうと線を無理矢理引っ張る。学級スタッフに注意されるが顔を見て話が聞けない。みんなで言うときは線を引っ張らずに見ながら行うことを指導した。	(d)
8 / 2 0	(給食) クラスメイトに「桃好き?」と聞かれ、すぐに「好き」と答えることができた。 食事後の掃除のバケツの水を捨てるが、クラスメイトがまだ掃除が終わっていないことに気づき「ごめんなさい!」とすぐに言うことができた。	(a)
1 0 / 4	(学級生単) 絵を描いた。色を塗るときに「色鉛筆を貸すので声をかけてください。」と伝えるが、言うことができず立ったり座ったりしている。借りたい時はどうしたらよいのか促すと、自分から借りに来ることができた。	(c) (b)

10 / 27	(現場実習報告会) 発表会前に指導者が作文を持っていると、近くには来るが声をかけられずうなっている。 どうしたらいいのかな? と促すと、自分からもらいにくることができた。	(c) (b)
1 / 19	(給食) クラスメイトに「どこ見てるの」と聞かれ、「工藤先生を見てました」と言うことができる。 (帰りの会) 返事がとてもよいことをほめると、だれも返事をしなくても一人で堂々と「はい」と返事をすることができるようになった。	(a) (a)
2 / 8	(体力づくり) 腹筋の回数を数えるペアを作る際に、自分からクラスメイトへ近づいて「いきますか」と言うことができた。	(a)

(イ) コミュニケーション態度の育成

作業学習で掃除点検を昨年から継続して行った。以前は友達の名前をどうやって呼んでよいかわからず、呼ぶことができなかったが、プリントを渡すときや帰りの会で指名するときなどに名前がスムーズに出るようになった。賞賛することで、クラスメイトとかかわることに自信を持ち、顔を見て会話ができるようになってきた。

(ウ) 人とのかかわりを楽しむという側面からのアプローチ

1年生の時から続けている日記帳の毎日の記入に対し、学級スタッフから質問をしたり、「楽しかったことをひとつ書いてきて下さい。」などという簡単な課題を出すことで、書いてきたことを見てもらいたいという気持ちが生まれ、楽しんで提出するようになった。提出する際には自分からノートを広げ、記入したページを見せてくるようになった。

(エ) 発声・発語の側面からのアプローチ

学校祭の前にHRで発声の練習として顔の体操を行った。目や口、舌をどのように動かしてよいかわからず動きがぎこちなかったが、継続することでスムーズにできるようになった。基本的な母音の口の形も意識をしないと最初はできなかったが、継続することでできるようになってきた。

HRで絵本の読み聞かせや、学級生単でかるたの読み手を行った。繰り返すことによって読むことにもなれ、聞き取りづらい時もあるが、堂々と読むことができるようになった。

イ 他の領域・教科や寄宿舎との連携した取り組み

各領域・教科や寄宿舎と連携し、指導内容、目標、手立てなどについて共通理解を図った。人との正しいかかわり方を身につける、気持ちを言葉で表現できるようになるということを目標に活動の様子の記録と交流を行った。

(ア) 国語

・作文など自分の気持ちを文章にして書くことが困難である。時間制限を設けると制限を設けない時に比

べ、取り組もうとする姿勢を見せる。何を書けばいいかわからず、困ったときには、質問しようとしていた。

(イ) 数学

- ・ A 君は最も高い能力別グループに所属しているため、単純な計算力は学年でもベスト5に入った。
- ・ 全体への問いかけ時、発問はまったくない。個別の問いかけは「はい」「いいえ」のように選択肢を示すことで言葉を発することができた。複数解答の少ない数学だが、説明的な言葉による回答は難しい。
- ・ 問題は正答できても、できたことを報告できず、教師の問いかけを待っている。完全に分からないときはペンを置きよそ見をしている。自信がない時に「わかりません」と言うことは3年生になってできるようになった。

(ウ) 保健体育

- ・ ペアを作る活動では、いつもペアになっているクラスメイトの方へ寄っていくが、自分から声をかけることはできなかった。以前はどうしてよいかかわからずフラフラしていることもあった。

(エ) 委員会活動

- ・ ラジオ体操コンテストを実施。誰が一番良い演示をしていたか、聞かれてもすぐには答えられなかったが、事前に時間をとって指導者と一緒に考えると、きちんと決めることができていた。
- ・ 重い物を持つ力があるので、後輩に指示されてではあるが、動いていた。得点板を戻す際、A 君から見て良い置き方があると思ったのか、しきりに「これ得点板」と言っていた。

(オ) 寄宿舎

- ・ 4月よりは話していると感じる場面がある。
- ・ 4月にあったように疲れたからと物に当たることはないが、疲れた時は「ふー」とため息をつき、疲れたことをアピールしている。
- ・ 自分の部屋のメンバーが全員そろった時は、「やっと全員そろった！」と喜んでいた。
- ・ 自分から話しかけてくることはなく、スキンシップが多い。言葉でうまく伝えられない時は、質問をし、話したいことを拾う。最終的には選択肢を設け、気持ちを確認した。

ウ コミュニケーション態度の指導でロールプレイして学習したことを、他の学習や日常生活場面にフィードバックしていく。

今年度は具体的な場面設定を行わず、問題に直面した時にその場でどのようにしたら良いか伝え、ロールプレイするようにした。(ア) ソーシャルスキルの側面からのアプローチの指導の実際にもあるように、色鉛筆や作文がほしい時に何と言ったらよいか具体的に確認することで他の場面でも言えるようになってきた。

また伝言をしてもらう時も、必ず何と言ったらよいか確認し、復唱してから行うことでスムーズに伝えることができ、自信にもつながった。

エ 日常生活場面でのかかわり、様々な活動の体験を大切にする。

(ア) 学級での取り組み

できるだけたくさんの人とコミュニケーションがとれるよう、事務室への伝言や必要な物品を取りにいったらもらう活動はA君にお願いした。行く前には必ずロールプレイを行い、誰に何と言ったらよいか確認してから行くようにした。何度か行うことで、事務室に入ることやお願いを堂々で行えるようになった。

様々な活動場面で、A君の興味関心の強いものを取り入れるようにした。放課後ランニングを行う場合はA君の好きな「ハートキャッチプリキュア」のMDを流して走ることで、意欲の向上を図った。

(イ) 学年でのかわり

a 学級以外の指導者とのかわり (記録表より)

日付	場面	様子
9 / 6	給食配膳時	食堂の舍務室前で、給食の配膳が終わるまで立ち話をした。舍務室の方から風が吹いていたので「いい風吹いてるね」と言うと「暑いから」と言い、外を指さしながら「いつまでこれが続くのか」と言っていた。
9 / 7	今金水産出勤時	格技場入口の手荒い場で手洗いをしている時にその場にいた他生とあいさつをする。その後「今日は先生、マイ白衣で」と3回くらい言っていた。
10 / 4	帰りの会	帰りの会の感想発表の時に「学級生単で〇〇先生に絵が上手だとほめられました。」とすることができる。美術の指導者に褒められたことで自信がもてたようだ。
10 / 7	体力づくり (記録日)	体操終了後、自分の前回までの記録を確認しに来たので、一緒に最近の記録を確認し「前は18分44秒だったので、17分台を目標に頑張ってください」と伝え、結果は17分29秒で意識して頑張れたようだった。
10 / 26	体力づくり	体育館のMDデッキの使用方を、自分なりに言葉で一生懸命に説明してくれた。

(2) 成功体験を積み、自信と更なる意欲付け。コミュニケーションマインドを育てる。

ア 質問に対する答えの選択肢を与え、自分で考えて答えることができたという気持ちを育てる。

文章を書く時や会話の中で、実際にあったことを答えることはできるが、自分の感情を言葉で表現することが難しく、返答できないことが多くあった。選択肢をこちらから与えることでスムーズに答えることができるようになり、会話も続くようになってきた。しかし質問自体に興味関心がないことは選択肢を設けても答えられないことや、選択肢を多く作りすぎると選ぶことができないこともわかった。

選択肢を与え、繰り返し自分の気持ちを自分で考える機会を設けたことで、作文を書く際の作文シートを7割ほど自分で記入することができるようになった。(入学当初は全く書けなかった。) また、帰りの会の感想発表を継続することで、その場で考えた自分の気持ちを話すことができるようになってきた。

イ 質問・報告・相談・伝言などができたら賞賛する。

作業学習などの決められた時間や作業内容の時は報告が定着してきたため、「だれにでも」「どんな場面でも」を意識し、かわった。質問や報告、できなかったことができるようになった時は個人的にA君だけを賞賛する場面と、学級全体の中で賞賛することを行った。特にクラスメイトの前で賞賛した時はできるようになったことが継続していた。伝言は意図的に指導者から指導者へしてもらうことで、できた時はすぐに賞賛し、うまく言えない時も適切な方法をその場で指導することができたため、効果的だった。

ウ 友人とかかわる場面を意図的に設定し、「楽しい」「話したい」という気持ちを育てる。

給食ではなるべく生徒同士で会話ができるよう、座席は指導者を端に配置し生徒同士を隣り合わせにした。ダジャレが好きなクラスメイトがいたため、そこから給食ではいつもダジャレを言うようになり、指導者が考えたものをA君からみんなへ伝えてもらったり、みんなが考えたダジャレにA君が点数をつけたりした。またその点数はどんな気持ちになるのか答えてもらうことをほぼ毎日繰り返した。今まではクラスメイトとはほぼ会話がなかったが、ダジャレを通してクラスメイトもA君へ積極的に話しかけるようになり、A君も答えるようになった。会話中の笑顔も増え、楽しそうにしていることが多くなった。

(3) 生活地図の活用

昨年度の3学年事例研究は各学科1名を抽出し実施していたが、今年度は、A君事例研究1本に絞り、学年全体の研究と位置づけた。そこで、よりA君の実態について共通理解を図るべく、現在の実態を添付資料のような生活地図に整理することにした。これにより、生活する上で、素因となるA君自身の障害の程度や傾向の他に、どのような条件が障壁となるのか「環境因子」を洗い出すことで、指導者との心理的・物理的距離感、集団の大小、場所などの諸条件との因果関係を探ることが目的である。既存の支援計画と見比べることで様々な手立ての参考になれば幸いである。

7 成果と課題

(1) 成果

書くことに関しては、作文は一人では書けず、書けても3行程度だった。現在は作文シートを使用すれば自分で考えて空白を埋めることができるようになった。また日記でも自分の感情を表す言葉を書くことができるようになってきた。

話すことに関しては、自信がなかったりどう話して良いかわからないこともあり、大人とのかかわりが多く、生徒同士の関わりがあまりなかった。たくさんの人との出会いやかかわりを通して、今ではクラスメイトとも楽しそうに教室で過ごしている。また大好きな先輩や後輩もできた。

進路先の面接へ行った際に、A君がクラスメイトへ「お昼ご飯何食べたの?」と話しかけたのを同席していた保護者が見ており、「A君がこんなふうに話すなんて、本当にびっくりした」と言っていた。また、児童相談所でも聞かれたことにほとんど自分で答えられるようになったとのことだった。

(2) 課題

3年目にして「どんな時でも」「どんな場面でも」「どんな人にも」ということが定着しつつあるが、新しい環境で今まで取り組んできたことがいかせられるかが課題である。できるようになったことに自信をもち、これからも新しい出会いやかかわりを大切にして進路先でも頑張ってもらいたい。

8 資料

【日記帳より】

2 / 14 (月)

体力づくりでエアロビをしました。つかれました。国語をしました。生単をしました。学級生単でチョロプリンを作りました。おいしかった。寄宿舎でせんたくをしました。せんたくのりょうはすくなくった。おふろにはいりました。おふろのおんどはあつかった。

○参考

・「そらまめくんのベッド」 福音館書店

添付資料

本研究では、これまで蓄積してきた行動観察の記録も含め、ICF（国際生活機能分類）の視点を参考に照らし合わせて実態把握を同時に進めていきたいと考えた。ICFの理念には「どのように生き生きとした社会生活が実現できるのか」という考え方が基盤にあり、今や世界の潮流である。我が国における理解度はまだ低い今後、特別支援のあらゆる教育場面でその概念が浸透してゆくだろう。

ICFの視点からA君の卒業後の豊かな生活の実現を目指す上で、環境要因（指導のあり方や学習環境）の改善、活動や参加状況の向上を目指して現在の力をいかに活かすのかを多面的に検討する必要性に気付く。これは、個別の教育支援計画を見直すことや授業における指導目標や内容を改善することにつながっていく。

ICFの視点から生活全体を見ていくと、学校だけでなく、関わりのある人や関係機関の支援によって解決できる困難や制限があることにも気付くかもしれない。どの機関と連携すればよいか再確認することで、個別の教育支援計画の見直しや活用について検討しやすくなるばかりか、卒業後の進路先（A君は江差町の施設に内定）に引き継ぐ際にもより有益なデータとなるであろう。

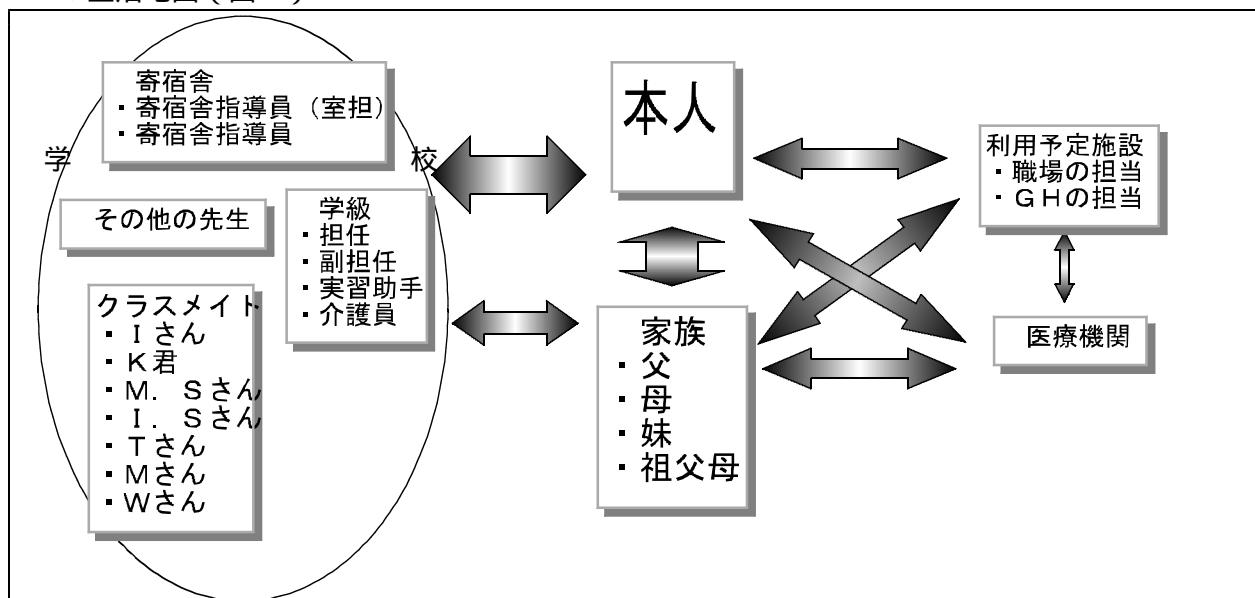
残念ながら本研究とICFをリンクさせることはかなわなかったが、以下の資料が今後の参考になればと願っている。

生活地図の活用

図1は大まかな相関図に過ぎない。実際の地図同様、ここから縮尺を上げていく作業を行う。

レベル1 A君の指導や支援に関わっている人や機関を抜き出し、生活地図に書き入れた。

▼生活地図（図1）



レベル2 次に実際の関わりの様子も記述する。（学校のみ）

養護教諭

養護教諭（女性） 保健室

自ら話しかけてくることはない。症状等こちらの問いかけには答える。「何で?」「本当ですか?」等リアクションも取る。

養護教諭（女性） 放課後

放課後の合同自主トレ後の体重・体脂肪測定の話題最低限必要なことは自ら話す。（記録用紙の残量等）

養護教諭（女性） 給食前

別の薬を渡し、すぐ薬を渡し直したとき、「これ違うから。変だと思った」何度も話す。

養護教諭（女性） 寄宿舎

自ら話しかけてきた。「何でここにいるの?」

学級担任（女性） SHR前後

日記の中を見せたがる。こちらが反応するまでは「見て下さい」とは言えず。

学級担任（女性） 給食

ギャグ、ダジャレを嬉しそうに他の人に伝える。

学級担任（女性） 歩くスキー大会
＊厳密にはクラスメイトの女子

金メダルだがエントリー1人だったことに触れ「1人だけ！」と何度も言い放ち、嫌みと取れてしまう発言だった。

学級（関わり多く一部割愛）

学級所属介護員（女性） 給食

物理的距離近い
返答に困る・面倒な時は、返事、目線あわさない。

学級所属介護員（女性） 学級生単

サッカー、メガネ、スキー、厚沢部、イモの話だとよく話す。

他学級

産業科学科付き（男性） 日常

関わりを求めて近づいてくる。
わざと分かりきっていることを間違えて言うとかんまりの勢いでツッコミがくる。「違うよ！違います！」

産業科学科付き（男性） 廊下

背後から近づいてくる
サッカー、プリキュアのことを話すが、説明は苦手
「はい」「いいえ」だと答える。

産業科担任（男性） 体力づくり前後

日本代表Tシャツ、ディズニーの話題
自ら話しかけてくるが、2文節語がほとんどで、こちらが話題を掘り下げると、答えられない。

産業科担任（男性） 日常

日本代表Tシャツ、A君の方が新しいモデルでエンブレムが刺繍なのでグレードが高い。「先生のはプリントで安物だからなあ」との教師の発言に対しその後、しつこく「先生の安物」と言ってくる。

産業科担任（男性） 体力づくり前後

関わりを求めて近づいてくる。
Tシャツを見せ合うことが恒例。

産業科担任（男性） 数学

発問はほぼゼロ。こちらの問いかけを待っている。
「わかりません」「できました」は促すと言える。

産業科担任（男性） 保健体育（普段体育は指導していない）
クロスカントリースキー

マンツーマンだが転倒時など助けを求めてくることはない。
指示・助言は確実に聞く。

産業科実習助手（女性） 学校行事

カメラ、放送記録（BGM）に興味があり自ら話しかけてくる。
「今日はユニ」「何撮るんですか？」

産業科副担任（女性） 委員会活動
自ら話しかけてくることはない。
指示を聞き行動に移すことができる。

農業科副担任（女性） 登校時玄関ホール

正面に立ち「おはようございます」と自らあいさつ。

農業科副担任（女性） 教室移動廊下

自ら話しかけてくることはない。問いかけ、指示は聞く。

進路指導担当教諭

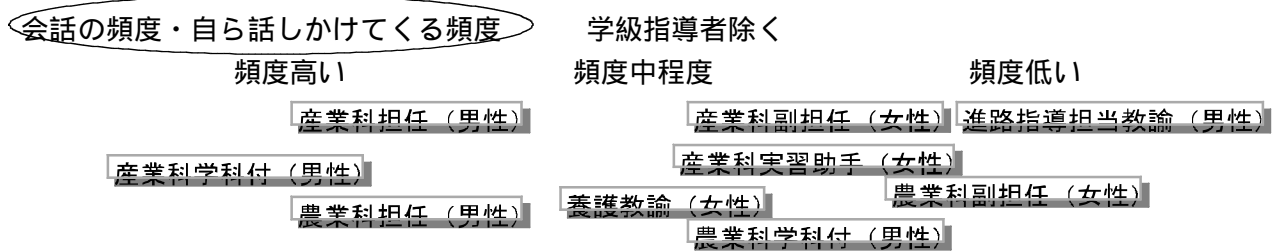
進路指導担当教諭（男性） 歯磨き

あいさつ程度 自ら話しかけてくることはない。

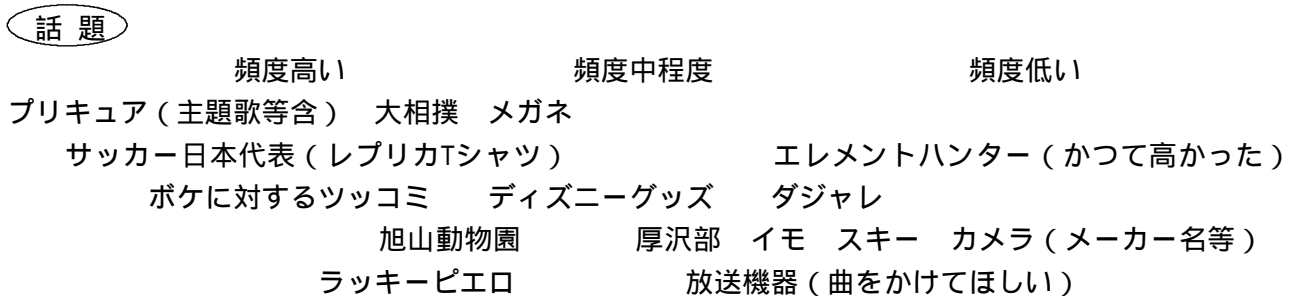
進路指導担当教諭（男性） 体力づくり

サッカー日本代表Tシャツについて話しかけてくる。

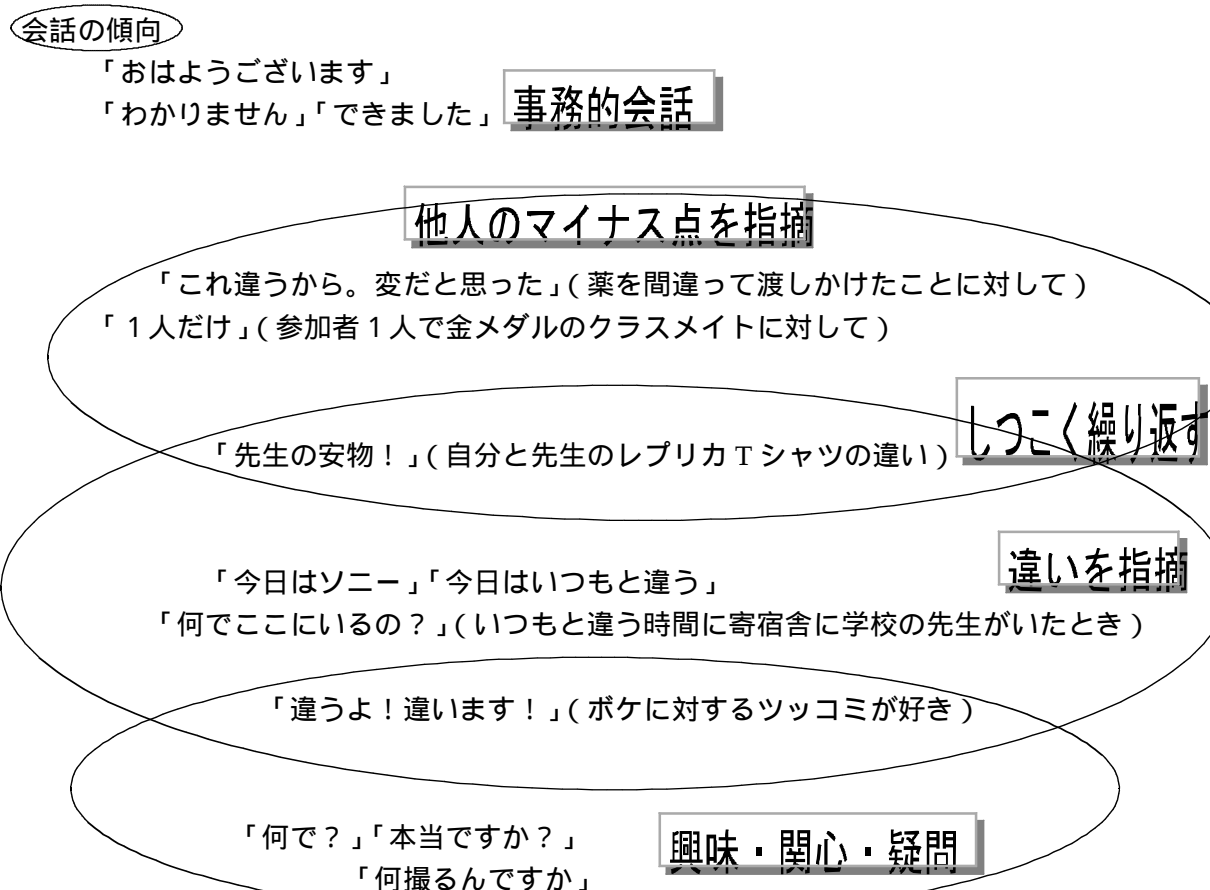
レベル3 レベル2の中から関連するものの要素を抜き出してみる。(KJ法)



記述はしていないが、受け持つ授業(委員会・部活動含)の多さは会話の頻度と比例しないことが分かる。また、年齢はさほど影響しないが、男性の方がやや話しやすい傾向にある。



会話の頻度が低い進路指導担当教諭ともサッカー日本代表 T シャツの話題は話す。興味関心のある話題があれば、自ら話しかけてくることがわかる。



その他、言葉は発しないが、見てほしい物があるときに自ら関わりを求めて近づいてくる。

これらのことから、A 君の関わりの傾向として「興味関心のある話題」「疑問点」「他者の（専らマイナス面の）指摘」「他者との違い」「要求」に大きく分けられる。

「違い」を含む自らの発見（手柄）を周囲に知ってもらいたい思いが強く、何度も繰り返しアピールするが、失礼に当たることが多いところが課題であろう。一方で、興味関心のある話題しか進んで話しかけてくることはなく自己の欲求が中心とも思えるが、他人の痛いところを突く客観的視点も持ち合わせていることもうかがえる。観察力は、諸刃の剣ではあるが A 君にとって今後大きな武器になりえるかもしれない。

学校祭の作文を書いた

タイトルを決めよう！

例：学校祭の思い出、思い出に残った学校祭 など

みんながもういっしょにはしゃいで学校

○いつ、3年生にとってどんな学校祭がありましたか？

11月21日、3年生にとって、11月

学校祭がありました。

○3年生は何というけさをやりましたか。

3年生はハコY魔法の絵本

人之生命如草之枯一也。

○ぼくは何の役でしたか？

一、七、二役のハルカ

○それではどうでしたか。

上巻の二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

○動光正子~~の~~村~~の~~。

4. 16 = 2 + 14 = 1 + 15

○お礼をやったかどうか？感想を書きましょう。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

3年間「一歩」だけかたです。

○今年の学校祭はどうでしたか？感想を書いてください。

(している先生が校長先生としてたくさんきました。
 あえてうれしかったです。中学校のたんじんの先生が
 3年間めにきてくれました。
 山本先生もきてくれました。
)
 たいじこの学校祭をせいにしめることができ
 てよかったです。

○十一時から(何を)しましたか？

生産品販賣部(共)大

(○我れ女ゝ此へはさへいふべしとたかふ)

[illegible]

⑨生産品販売をした感想を書いてください。

[illegible]

○お昼一飯は誰と食べましたか？

ぼくとから、と申す校のたんにん生生のが、

○お昼一飯で食べたものや、感想をおしえてください。

12-11-2106, 12-11-2106, 12-11-2106

○これより如何なる事となるか。

金銀合器

○何を歌いましたか？

[illegible]

○感想をおしえてください。

$\frac{1}{2} \times 10^{-1} = 10^{-1}$

「さきふしにふりかへて、このころに、あつた。」

練習"とおりでキ、に
○○ 十(十)サ、

○うれしか、た△△ 練習どまりでまゐった

$$x, y, z, t, u, v, w, x, y$$

× 失敗した × ×

成 111 111 0 0

● 4# = 2# 00

卒業へむけて

卒業生が卒業 卒業生が卒業 卒業生が卒業

卒業したらどんな人になりたいですか？

① 卒業したらどんな人になりたいですか？

② 卒業したらどんな人になりたいですか？

③ 卒業したらどんな人になりたいですか？

④ 卒業したらどんな人になりたいですか？

⑤ 卒業したらどんな人になりたいですか？

卒業生が卒業 卒業生が卒業 卒業生が卒業

卒業へむけて

卒業生が卒業 卒業生が卒業 卒業生が卒業

卒業したらどんな人になりたいですか？

① 卒業したらどんな人になりたいですか？

② 卒業したらどんな人になりたいですか？

③ 卒業したらどんな人になりたいですか？

④ 卒業したらどんな人になりたいですか？

⑤ 卒業したらどんな人になりたいですか？

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

卒業へむけて

第Ⅲ章

プロジェクト研究

「教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理」

1 研究主題 『教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理』

2 主題設定理由

昨年度末、本校の研究課題に関するアンケート調査を行い、その中で本主題に関する意見が出された。今年度に入り研修部会、研究推進委員会を通して話し合った結果、本主題で研究を行うことが確認された。

本校に限らず、「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」「通知表」など指導計画をたて、それを評価しながら教育活動が行われている。一人ひとりの生徒がその実態や個性に応じて持ち味を発揮するためには、適切な指導計画・評価は欠かせない要素である。本校においては、「個別の教育支援計画」は支援手帳としてモデル版の様式を用いて持ち運べるサイズに変えたものを使用している。様式についてはモデル版と同様のものである。「個別の指導計画」は各教科領域毎の目標及び手立てを前期と後期に分けて記入し、その実施した評価は「通知表」に記入している。現在行っている形も工夫され効率的になっているものではあるが、更に工夫改善できればと考える。

本研究を通して、指導計画における個人目標の設定から評価までの一連の流れを、より効率的かつ実用的なものをめざし、生徒の指導・支援に結びつけられるよう整理していきたい。これらの理由から本主題を設定した。

3 研究の内容と方法

内容としては、本校の現在の様式やその作成時期、記入方法などを元に不具合な点を洗い出す。各学年部会や保護者から、何か使い難い点を挙げてもらい、改善のための参考とする。また、他校の取り組みを調査し、効率的に運用している事例を参考にして本校の様式に活かしていく。一方では、現在卒業生のいる事業所より、支援計画の様式を教えてもらい、移行支援をスムーズに行うために必要な情報をまとめていく。

方法としては、教育課程検討委員会の中で中心となるワーキンググループを組織し、そこが中心となって立案していく。校内においては各学年部会で検討を行うよう、現様式を印刷・配布し、一方では他校の様式や取り組みについて調査を行う。これらを元に様式等を整理する。

4 研究の経過

4月 研修部会、研究推進委員会を経て、全体研修会で本研究の実施を確認する。

6月 全体研修会にて、教育課程検討委員会が中心になって本研究を行うことを確認する。

7月 教育課程検討委員会にて、本研究ワーキンググループ（WG）を立ち上げる。

8月 WGで進め方を確認する。

10月 各学年会で現在の様式等について意見を集約する。（調査1）

道内知的障害単置高等部・特別支援学校13校を対象に調査を行う。（調査2）

全体研修会にて中間報告を行う。

11月 現様式の課題点、他校の取り組みを整理する。

12月 WGで進め方を確認する。

教育課程検討委員会にて方向性を確認する。

1月 支援計画（支援手帳）に関して保護者に調査する。（調査3）

移行支援に関して事業所に調査する。（調査4）

WGでまとめ方を確認する。

2月 全体研修会にて研究成果の報告をする。

(調査 1) 本校における教育支援計画、指導計画、通知表の様式について

- < 調査対象 >
1 学年部会、2 学年部会、3 学年部会
- < 調査の内容 >
・個別の指導計画の様式や活用する上での不具合な点
・個別の教育支援計画「支援の目標及び評価」の様式や活用する上での不具合な点
・通知表（前期・後期）の様式や活用する上での不具合な点 の 3 点
- < 調査期間 >
10 月～11 月

(調査 2) 他校における教育支援計画、指導計画、通知表の様式について

- < 調査対象 > 道内知的高等養護学校（支援学校）
札幌高等養護学校、小樽高等支援学校、豊明高等養護学校、白樺高等養護学校、
小平高等養護学校、新篠津高等養護学校、夕張高等養護学校、雨竜高等養護学校、
美深高等養護学校、紋別高等養護学校、伊達高等養護学校、中札内高等養護学校、
中標津高等養護学校（計13校、うち回答 7 校 + 1 校 小樽は研究会の資料より）
- < 調査の内容 >
・個別の指導計画の様式
・個別の教育支援計画「支援の目標及び評価」の様式
・通知表（前期・後期）の様式
・運用に際し工夫・配慮されている点 の 4 点
- < 調査時期 >
10 月

(調査 3) 本校における教育支援計画、指導計画、通知表の活用について

- < 調査対象 >
在籍する生徒の保護者
- < 調査の内容 >
・個別の教育支援計画の様式や不具合な点
- < 調査時期 >
1 月下旬～2 月上旬

(調査 4) 本校卒業生の進路先における個別支援計画の活用状況について

- < 調査対象 >
卒業生が在籍する事業所（抽出）
- < 調査の内容 >
・支援計画の様式
- < 調査時期 >
1 月

5 まとめ

(1) 各学年から出された課題等について(調査1より)

各学年の課題等比較一覧表

	出された課題点	改善の方策
1 学 年	他学科作業に関しては、通知表を書く段階で「目標」をたてている状態で、個別の指導計画でたてた作業学習の目標に沿って評価することも可能ではないか。	他学科作業の組み方について検討され、一部変更になる予定。 基本的には、通知表の目標を自学科と他学科共通として評価する。 (やや曖昧になっていたが、これまでこの形で評価していた。)
2 学 年	支援計画や指導計画について保護者と話す時間が短いと感じる。保護者のものとなっているのか？ 支援計画の「身辺自立」「対人関係」「コミュニケーション」「働く力」「生活技能」「その他」と指導計画の「総合目標」「日常生活の指導」「体力づくり」が別々のような感じで、保護者はどう押さえているのか？また、こちらもどの様に押さえていけばよいのか分からない。(支援計画の各項目は、開校当時からの“つきたい力”であり、以前はそれぞれ細かく評価をしていた) 軽減するのであれば、特別活動か所見欄か？所見欄は広いが、すべて書かなければならないのか？押さえは人によりまちまち。 評価の部分よりも個別の目標と学習内容の字数が多くなり、ポイント数を小さくしているが、見にくい。 ポイント数を大きくして保護者が見やすいようにしてはどうか。出欠の記録は次のページでも良いのではないか。	懇談の時間の確保と「支援計画は保護者のもの」という説明を周知する取り組みが必要。 確かに現在共通する項目にはなっていない。指導計画は学習場面に即した教科毎にたてるので、支援計画の項目を変える以外は揃うことはない。 どちらも異なる項目なので、どちらか1つということにはならない。所見欄の幅は、記述する文章量に合わせて変えることは可能。見やすい工夫は必要。 通知表の「目標」「学習内容」「学習の様子」の各欄の幅は、文字数に合わせて縦線を調節すれば見やすくなるのであれば、可動式とするのがよい。 出欠の記録を別のページに移すことは可能だが、の課題と相反するところが出てくる。
3 学 年	「対人関係」と「コミュニケーション」の区別が難しい。 「その他」の項目に何を書けばよいのか？ 進路先や施設などに見せることになるので、記述に気を遣う。内容が通じるかどうかなど。 目標の欄が狭く、文字数に制限がある。(たくさん個別の指導計画に書いても書ききれない)	判断が難しい内容は、どちらに書いても良いと思われる。 他の項目で書けないことを書き、特になければ記入する必要はない。 もちろん記入に際しては細心の注意が必要。伝わりやすい文章になるよう、複数の目でのチェックが必要。

校内において、通知表等の不具合な点はどこにあるか調査を行った。各学年部会で協議してもらい、それをワーキンググループで(WG)集約した。出された課題は上記の表のとおりで、それに対する改善の方策をWG、教育課程検討委員会で協議し、その結果も表にまとめた。

出された課題だが、個別の教育支援計画に関して()は、様式というよりも記入する項目についてのものが多く、一部整理することで対応できることが分かった。

個別の指導計画()では、保護者との懇談の持ち方、生徒の学習課題を保護者と共有することが求められる。

通知表()では、記入する欄や文字数などの課題が挙げられるが、一方では、文章の書き方を工夫することでおおむね改善されるものと考えられる。

(2) 他校の様式について (調査 2 より)

各校の様式等比較一覧表

校名	調査から分かったこと
小平高養	支援計画はモデル版と同様式。 通知表は指導計画の様式と揃えているが、記入の際は重複している様子。 指導計画や通知表は、教科領域毎に 1 ページ使用。 通知表の記入に際し「記入について」(記入要領) が整理されている。 通知表は 1 年間使用。(前期渡しきりではない)
札幌高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画は、行動特性、長期的目標、育てたい力、自立活動、形態別の目標・手立て・結果や課題。 通知表「共育メール」は指導計画と項目を揃えている。保護者からの願いや要望で 1 ページ。
中標津高養	支援計画のフェイスシートに健康に関する記録 (既往症、アレルギー、食事や運動の制限、現在の病気・服薬、かかりつけの病院、発作について等) 3 ページ追加。 指導計画の目標は長期 (1 年間) でたてている。= 支援計画の短期目標 通知表以外に日生・自立活動・働く力等の 3 ヶ年の変化を記した「学校の様子」を発行。
夕張高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画と通知表を一本化。
美深高養	支援計画はモデル版と同様式。 指導計画 (移行支援計画) は、重点目標と前期 3 点、後期 3 点、及び評価。 通知表は、各教科等の目標、評価項目、評価・学習の様子。
新篠津高養	「課題設定の理由」がない以外はモデル版とほぼ同様式。 通知表は、各教科等で項目に沿って 5 段階評価と特記の記述を併用。 後期には「現場実習」の項目がある。
白樺高養	支援計画と移行支援計画の重複部分を整理し、1 本化。 支援計画の短期目標は、指導計画とつながる項立てに改善。 指導計画は、「自立活動」「日常生活」「社会生活」「働く」の項目で、「日常生活」「社会生活」は学校以外に舎と家庭の記入欄がある。2 ページ 通知表は、ABC の 3 段階評価で、生単、総合、作業については記述式。
小樽高支 研究会資料から	指導計画が保護者向けと本人向けの 2 種類あり、本人向けのものがそのまま通知表になっている。 生徒の意向を尊重し、計画を立てる際に個人面談を行っている。

校内の課題の割り出しと併せ、他校の実情についても調査を行った。

得られた資料からいろいろなことが分かり、大変有意義であった。

まずは個別の教育支援計画であるが、基本的に道教委で作成したモデル版をそのまま使用している学校が多い中で、中標津高等養護学校では、フェイスシートに生徒の保健・健康面での項目を追加していた。また、白樺高等養護学校では、移行支援計画との整理を行っている最中ということで、今後まとめられる成果が期待される。

個別の指導計画と通知表をいかに融合化し、効率的に計画と評価を行うか、どの学校もそれぞれに工夫されていることは共通するところである。その最たるものは夕張高等養護学校で、個別の指導計画と通知表が一体化している。とても効率的に運用されていることが分かった。

(3) 保護者から出された課題等について (調査 3 より)

教育支援計画に関するアンケート 集約結果 (回答 3 8 枚)

1 . フェイスシートの内容は、十分なものとなっていますか？

足りない項目は？

- ・ 十分です。
- ・ フェイスシートの内容は、十分なくらいまとめてあるので足りない項目はありません。
- ・ 緊急連絡先の項目は、 3 まであった方が良い。

必要のない項目は？

- ・ なし

改善点は？

- ・ もう少しコンパクトになると良い。
- ・ 細かい部分まで書いてあるので十分だと思います。

2 . 個別の教育支援計画は、保護者の意向に沿った形となっていますか？

- ・ わかりやすい。
- ・ 十分に沿った形になっています。
- ・ 話して相談したものに沿っています。
- ・ 保護者の意向はもちろんの事、保護者、本人、学校の意向や方向性が分かりやすいので良いと思います。
- ・ 今のところ、特別使用することもないのですが、この先たとえば他の関係機関で使用する時、入学してから学年末までと 1 年間間があり、その間の情報はどのくらいだろうか、口頭で細かく説明することになるのでしょうか、そのところを少し書き加えて頂けると、いざという時に役立つような気がします。

3 . その他、教育支援計画に対してお気づきの点がありますか？

- ・ 支援の評価基準は特にありますか？あれば基準も載せて欲しいと思います。

* その他の意見・要望

- ・ 現場実習先の記録として、実習先の作業内容やその評価を簡記されていればよいと思います。
- ・ 相談機関の他に卒業してからの進路先の名簿等があればと思います。選択する時の情報があれば視野が広がり、安心感があると思います。
- ・ 子供が実習をして、気に入らなかった場合、次への対応が早く良かった。

(4) 高等養護学校卒業後の個別支援計画の一例について (調査 4 より)

「個別支援計画」は、障がいのある方の乳幼児期から成人期までの一貫した支援を行うことを目的として作成されるものである。そのため、本人を取り巻く各支援機関を結ぶツールとしての役割が期待されている。この部分では、いわゆる学校卒業後の社会人 (成人期) の部分の「個別支援計画」について簡単に触れることを通して、本校の「個別的教育支援計画」をはじめとした各種計画作成に関して参考になるかもしれない (一貫性の意識等) と考え、具体例を取り上げてみることにした。

現状としては、学校を卒業した場合で考えると、一般就労 (企業就労) では、学校の「個別的教育支援計画」のような就労支援のための「個別支援計画」にあたる部分は、3年生の現場実習先での話を聞く限りではあまり聞かないのが現状である。北海道障害者職業センターでは、ジョブコーチを活用する際に、職業評価をはじめとして「支援計画」を作成することになるが、現段階では、現場実習にジョブコーチを活用することはできない。(そのため現状では、企業側が職員をつけてほしいと言ってきた場合には、学級担任等が引率という形でつくことになる。)

ただ、国や都道府県は、障がい者の企業就労を進める方向性を示しており、その中で、就業・生活支援センター (道南地区は「すてっぷ」) の整備なども示しており、就業・生活支援センターの専門性を活用することも一つの方法であると思われる。また、就労支援には、生活の部分の支援も当然必要となるので、その際には、障がい者総合相談支援センター (道南地区は「めい」) の専門性を活用することも企業就労における個別支援計画作りには大切になるとと思われる。(そして、企業を含めたネットワークができていくのが理想である。)

一方、福祉的就労については、平成 15 年度に措置制度から支援費制度に切り替わった際に、サービス提供事業者には、「個別支援計画」の策定が義務づけられるようになった。それにより従来の福祉施設中心としたサービス提供から個人に応じたサービス提供へという流れができ、平成 18 年度から施行された障害者自立支援法を経て、福祉サービスの利用に関しては、施設中心から個人中心への流れが少しずつ大きくなってきている。

福祉的就労の場合には、利用者本人が、自治体 (市町村) の窓口を通して、福祉サービスの利用を希望し、福祉サービス事業所と利用契約を結ぶことになる。その契約ということだけを考えれば、ある意味学校の「個別的教育支援計画」以上に重要とも考えられる。

そこで、今回は 3 年生の現場実習先の中から、1カ所だけ例示してみたいと考えた。その福祉サービス事業所は、いわゆる多機能型事業所と言われるところで、「就労移行支援事業所」と「就労継続 B 型事業所」の二つの事業を展開しているが、当然、二つの事業所では異なる支援計画を作成し、サービスを提供しているとのことであった。

そこで今回は、本校の 3 年生が実習をした就労移行支援事業所の書式をいただいて載せることにした。実習担当のサービス管理責任者の方と話をしたが、特に就労移行支援事業所では、基本的に 2 年間をめどにして、職場実習なども取り入れながら就職を目指すということを基本としているとのこと。

また、地元の今金町の福祉施設職員と福祉サービス事業所の個別支援計画の状況について意見交換をすると、どの福祉サービス事業所も、基本の項目 (基本的生活習慣、対人関係、作業能力など) を押さえながらも、そのサービス事業所の特色と利用者本人の実態を考え合わせながら作成することになるとのこと。そのため、福祉サービス事業所の書式も、ある意味無数にあると考えられ、よりよいサービス提供のために、「個別支援計画」の創意工夫が進められているのだと思われる。

6 成果と課題

(1) 成果

今回、校内（保護者、各学年）他校など、調査を行うことで多くの声や運用の実情を知ることができ、大変有意義な研究となったことは大きな収穫である。

個別の教育支援計画についてであるが、本来「家庭のもの」であることを再確認し、今後は記入する際から保護者が記入するように変えていくことが求められる。例えば、現在フェイスシートは、入学時に提出される書類を元に担任（学級）で必要項目を転記している状態であるが、今後は、フェイスシート自体を直接記入してもらうことも考えていく必要がある。但し、入学時に提出してもらう書類の内容や項目を精査していかなくてはならない。

また、「支援の目標及び評価」の中で「対人関係」と「コミュニケーション」の欄は、「対人関係・コミュニケーション」とすることで内容の重複は避けられるものと考えられる。

個別の指導計画については、現在通年（前期後期合わせて）で A4 版 1 枚作成している。これは、他校にない程簡素化されている。通知表には各学習項目の目標をコピー & ペーストして別個に作成しているが、これに関しては非効率的というわけではないものと考えられる。

また、前・後期とも渡しきりにしているため、休業日明けに戻って来ないということが避けられる点と、その都度印刷すればよいという点で、今後も継続することが望ましいと考えられる。

これらのように、運用面での方向性を示すことができたことは大きな成果である。

(2) 課題

実際の運用に際し、課題となるところも浮き彫りになった。

個別の教育支援計画については、入学時に提出してもらう書類の精査ということで前述したところであるが、配布する書類の項目が重複しないように整理しなくてはならない。また、今後は小学校や中学校で作成され、それを持参するケースが増えていくものと考えられるが、これらと本校の支援手帳との関連についても整理していかなくてはならない。

一方では、このシステムがスタートした当初の「支援計画は保護者のもの」という理念に立ち返り、在学中の課題とその支援について学校と保護者が一緒に計画をたて、一緒に支援していくものにしていかなくてはならない。また、卒業後の進路先に、その子の特徴や配慮すべく点、こういう支援があればこういうことができるなどの情報を「移行支援」として、分かりやすく引き継いでいけるものを整理していかなくてはならない。

個別の指導計画及び通知表については、個別の教育支援計画とは性質が異なり、学校で作成・運用していくものであるため、基本的にはその体系は変わらないものではあるが、例えば他学科作業の位置づけが変わるなど、実際の学習場面において変わるところがあれば、それに応じて部分的に修正する箇所が出てくることも考えられ、臨機応変な対応が求められる。但し、保護者からはこころ変わるなどと思われない配慮も必要である。

一方では、記入に際して文章力の向上が求められる。同じ指導集団として、互いに忌憚なく推敲できるような日常的な関係作りが必要であり、少ない文字数でも的確にかつ分かりやすい表記ができるように日頃から意識することが肝要となる。（「別紙 5 今後の方向性」参照）

7 資料、参考文献等

- | | |
|--|----------------|
| (1) 個別の教育支援計画（本校様式・様式 2「支援計画」） | 別紙 1 |
| (2) 個別の指導計画（本校様式） | 別紙 2 |
| (3) 通知表（本校様式） | 別紙 3 |
| (4) 某就労移行支援事業所における個別就労移行支援計画書 | 別紙 4 |
| (5) 今後の方向性 | 別紙 5 |
| (6) 個別の教育支援計画モデル版（平成 17 年）北海道教育委員会 | |
| (7) 盲・聾・養護学校における個別の教育支援計画（平成 16 年）ギアース教育新社 | |
| (8) 障害児・者の社会参加をすすめる個別移行支援計画（平成 14 年）ギアース教育新社 | |
| (9) 知的障害者のためのアセスメントと個別支援計画の手引き | 2008 年版 |
| | (財)日本知的障害者福祉協会 |

平成 2 2 年度

個別の教育支援計画

氏 名	今金 太郎	性別	男	学校名	北 海 道 今 金 高 等 養 護 学 校
作成者	産業科 1 年学級担任:中里 花子			作成日	平 成 年 月 日 (新 規)

本人・保護者・学校の希望・願い

	現在の希望・願い	将来の希望・願い
本人		
保護者		
学校		

家庭と学校の確認事項

学級担任氏名	

進路支援・移行支援に関する事項

進 路 希 望 先	第 1 希 望	第 2 希 望
現場実習の記録	1 学年	
	2 学年	
	3 学年	
特記事項		
3 年次には進路先も記入する。		

支援の目標及び評価

	支援の目標（年間）	連携機関	評価時期	支援の評価
身 辺 自 立		ここには学校外の外部機関を記入してください 例 函館児童相談所 ステップ ぱすてる 等		
対 人 関 係				
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン				
働 く 力				
生 活 技 能				
そ の 他				

特記事項（次年度の方向性等）

--

【別紙２】本校個別の指導計画様式

平成 年度 個別の指導計画（個別目標・手立て一覧表）

学科・学年		○業科 ○ 学年	氏 名	今 養 太 郎
形態等	期	個別目標	手立て	担当者
総 合 目 標	年間	・ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ・ をつける	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 一文字あける	今金一郎 利別花子
日 常 生 活 の 指 導	前期	以下同上		
	後期			
体力づくり	前期			
	後期			
課 題 学 習	国語 前期			
	国語 後期			
	数学 前期			
	数学 後期			
生 活 単 元 学 習	前期			
	後期			
作 業 学 習	前期			
	後期			
総 合 的 な 学 習 の 時 間	前期			
	後期			
音 楽	前期			
	後期			
美 術	前期			
	後期			
保 健 体 育	前期			
	後期			
自 立 活 動	前期			
	後期			

[illegible]

自立活動の記録

個別目標	学習内容	学 習 活 動 の 様 子
・○○○○○○○○○○ ○○ ・をつける 個別の指導計画からコピーする	「○○○○○」 「 」をつける 個別の指導計画からコピーする	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○ 最初は一文字あける 必要に応じて行数を増減させたり、ポイント調整してページ内に収める

特別活動の記録

[illegible]

総合所見

○ ○

最初は一文字あける

必要に応じて行数を増減させたり、ポイント調整してページ内に収める
個別の指導計画の「個人目標」の評価が入る
厚紙の印刷は本票の「教務主任」「教頭」が終わってからしてください。厚紙が無駄になりますから。

V 出欠の記録

区 分 \ 学 期	前期(4 月～ 9 月)	後期(1 0 月～ 3 月)	計
授 業 日 数	○ ○		
出席停止・忌引き等の日数	○ ○		
出 席 す べ き 日 数	○ ○		
欠 席 日 数	○ ○		
出 席 日 数	○ ○		
備 考	風邪○○ 欠席理由を書く		

校長印

担任印

【別紙４】 就労移行支援事業所（函館地区）の個別支援計画書より

個別就労移行支援計画書

利用者氏名	作成日 平成 年 月 日	サービス管理責任者	支援担当責任者
-------	--------------	-----------	---------

	通所前期（基礎訓練期）	通所中期（実践的訓練期）	通所後期（定着期）	訪問期（フォロー期）
期 間	3 ヶ月	3 ヶ月	3 ヶ月	3 ヶ月
基礎的体力、理解力、作業能率等の向上				
持続力、集中力等の労働習慣と意欲の向上				
職場における協調性の向上				
職場規律、社会規律の遵守				
職場への定着				
健康管理				
金銭の使用、管理等				

平成 年 月 日

利用者氏名

印

保護者氏名

印

サービス管理責任者氏名

印

【別紙 5】今後の方向性

項 目	方 向 性	備 考
個別の教育支援計画	(管理) 基本的には保護者が作成・保管する原則に沿って進める。学校には写しを保管する。 帰省時の「支援手帳」の持ち帰りについては、今後その必要性を検討し、場合によっては廃止する。 (作成) 中学校までに使用していたものは、継続して使用し、必要な項目は新たに記入してもらう。 新規作成の場合は、入学時にフェイスシート(様式1)を保護者に記入してもらい、教育支援計画(様式2)は、保護者懇談時(PTA 総会等)に確認しながら記入する。これに併せて、入学時に配布する書類を整理し、効率的に情報収集を図る。 (様式の変更) 「支援の目標及び評価」の中で「対人関係」と「コミュニケーション」の欄は、「対人関係・コミュニケーション」とする (追加・修正) 支援計画短期目標の評価を追加したり、修正する場合は、保護者が管理する原本に直接記入(または差し替え)し、学校で保管する写しも同様に修正する。	懇談する時間の確保が課題となる。
個別の移行支援計画	(移行支援計画) 卒業後の進路先での仕事の内容に沿って参考となる事項を整理してまとめる。 作成したものを保護者に渡し、了解を得て写しを進路先に渡す。	作成し、保護者と確認する時期などは検討を要する。
個別の指導計画	基本的にはこれまで通り、前後期に分けて目標と手立てをたて、その評価を通知表で行うこととする。 様式の変更はなく、現状のものを引き続き使用する。 今後、必要に応じて様式を修正する。	
通知表	基本的にはこれまで通り。 他学科作業の評価に関しては、個別の指導計画でたてた「作業学習」の目標に沿って行う。(1 学年産業科と農業科のみ) 記入する幅など細部に関しては、必要に応じて修正する。	作業学習の目標は、他学科作業も意識してたてる。

第Ⅳ章

寄宿舎の研究

1 はじめに

本校寄宿舍では、「個別の教育支援モデル」の構想を受け、個別指導支計画やフェイスシートの作成などを教務と連携して行ってきた。生徒の卒業後を見据えた指導計画や、保護者や関係機関との連携が求められている状況である。寄宿舍ではこれまで個別の指導計画の作成方法について、職員へのアンケートや評価基準の見直し、様式の検討などを随時行ってきた。今年度についても、今まで以上によりよい指導計画の設定、関係機関との連携を図ることができるよう実施方法について探っていきたい。

2 今年度の取り組みについて

今年度は以下の点を柱に研究を進めていくこととする。

よりよい個別の指導計画のあり方について

よりよい個別の指導計画に向けて、評価基準の見直しや内容の検討をしていくことや、今後に向けて、今まで以上に ICF の理念に基づいた個別の指導計画の検討が必要と考え、検討していく。

3 実際の取り組みについて

昨年度、寄宿舍内では「個別の指導計画」「舎室経営計画」「フェイスシート」について、書式の改訂を行った。同時に、個別の指導計画などを作成するにあたって評価の段階が記されている「記述観点」についても見直しを行った。今年度については、さらに分かりやすく記述できるように「記述観点」（資料 1 参照）の再検討と見直しを部内で行った。しかし、今年度から「個別の指導計画」「舎室経営計画」「フェイスシート」の様式が改訂（資料 2 参照）されたことで、作成の際に、記入内容や表記の周知に曖昧な部分が見られ、完成するまでに時間がかかってしまった。これについては、記入の仕方について毎日、引継ぎ時に使用する連絡簿で全体に周知したり、個別に対応し内容を理解してもらうなど、よりよい個別の指導計画に向けて、部内で十分に検討し行ってきたことで改善できると考

える。また、今まで以上に ICF の理念に基づいた個別の指導計画の検討が必要と考え、部内で検討しているところである。

4 研究のまとめと今後の課題

今年度は、よりよい個別の指導計画のあり方について研究を進めてきた。新しい様式になったことでの不具合が見られたが、その都度、検討を重ね試行錯誤することで、よりよい個別の指導計画に近づいてきたと思われる。今年度の取り組みを今後に生かしていきたいと考える。ICF の理念に基づいた個別の指導計画については、様式の完成までには至らなかったが、今後は、生徒の卒業後の生活をより一層見据えた指導計画が必要となってくる。そのためには、本人の願いや保護者のニーズを十分に生かし、計画的に進めていかなければならず、「よりよい個別の指導計画のあり方」においても必要不可欠なものとなると考える。今後も検討と協議を重ね、個別の指導計画がよりよいものとなるように、個々の専門性を高めると同時に、保護者や関係機関との連携を図っていきたいと考える。

資料 1 個別の指導計画、フェイスシート 記述観点

1 身辺自立

(1) 起床

- ・日課に従って起床、就寝することができる。
- ・目覚まし時計をセットすることができる。
- ・布団をたたむことができる。
- ・時間内に身支度を済ませることができる。

(2) 洗面

- ・洗面器、タオル、洗顔料を使って洗面をすることができる。
- ・すすぐことができる。
- ・鏡を見て泡が残っていないか確認することができる。
- ・タオルを絞ることができる。
- ・洗面器を洗い、ふいてから片付けることができる。

(3) 歯磨き

- ・前歯、奥歯、歯のすき間などまんべんなく磨くことができる。
- ・鏡を見ながら汚れを意識して磨くことができる。
- ・すすぐことができる。
- ・歯ブラシ、コップを丁寧に洗うことができる。
- ・周囲の汚れに気付きふくことができる。

(4) 入浴

- ・入浴の必要性が分かる。
- ・入浴の準備ができる。
- ・タオルで前を隠して浴室に入ることができる。
- ・体を洗うことができる。
- ・髪を洗いすすぐことができる。
- ・適度にお湯につかることができる。
- ・マナーを守り入浴することができる。
- ・入浴後の後始末ができる。

(5) 排泄

- ・尿意、便意を感じてトイレに行くことができる。
- ・ロックをして他の人が入っていないことを確認することができる。
- ・ふき取りを丁寧に行うことができる。
- ・使用後に水を流すことができる。
- ・衣服や周囲を汚した場合には後始末をすることができる。
- ・お尻を出さずに小便をすることができる。(男子)
- ・手を洗うことができる。

(6) 生理の手順 (女子)

- ・生理になったことがわかる。
- ・ナプキンを正しく当てることができる。
- ・はずしたナプキンをトイレトペーパーで包んで捨てることができる。
- ・ナプキンを適切に取り替えることができる。
- ・汚れた下着を取替えて洗うことができる。

(7) 更衣

- ・更衣カーテンの中に入り立位で更衣することができる。
- ・適度な時間内に更衣を済ませることができる。
- ・衣服の前後、表裏がわかる。
- ・身だしなみを整えることができる。
- ・脱いだ服を洗濯袋に入れることができる。
- ・脱いだ服をたたむことができる。
- ・時と場面に合った服装をすることができる。

(8) 食事

- ・食事の準備、後片付けをすることができる。
- ・好き嫌いをしないで食べることができる。
- ・主食、副食を交互に食べることができる。
- ・箸、スプーン、フォークを使い分けることができる。
- ・正しい姿勢で食べることができる。
- ・周囲を汚した場合は処理することができる。
- ・適度な時間内で食べることができる。
- ・マナーを守って食べることができる。

(9) 整理整頓

- ・自分の持ち物がわかる。
- ・使った物を元の場所に片付けることができる。
- ・持ち物を分類して決まった場所に片付けることができる。
- ・衣類のたたみ方や収納方法が分かる。

(10) 洗濯

- ・衣服や寝具などの汚れに気が付くことができる。
- ・洗濯に必要な物を準備することができる。
- ・洗濯機の操作ができる。
- ・洗濯物の量に応じて適量の洗剤、柔軟剤を使うことができる。
- ・必要に応じて下洗いをすることができる。
- ・衣類のしわを伸ばして干すことができる。
- ・乾いた衣類がわかり取り込むことができる。

(1 1) 清掃

- ・ 掃除機をかけることができる。
- ・ ちりとりでゴミを集めることができる。
- ・ 雑巾を絞ることができる。
- ・ 隅まできれいに拭くことができる。
- ・ モップをかけることができる。
- ・ 清掃場所に応じた掃除用具を使い分けることができる。

2 社会性

(1) 公共機関の利用

- ・ 公共のマナーを守って利用することができる。
- ・ 郵便局では ATM の利用、はがき、切手のなどの購入ができる。

(2) 交通機関の利用

- ・ 自分の乗り降りするバス停や駅が分かる。
- ・ 現金、バスカードでの支払いができる。
- ・ マナーを守って乗車することができる。
- ・ 不測の事態には寄宿舍や保護者に電話をかけることができる。
- ・ 緊急を要する場合には周囲の人に助けを求めることができる。

(3) 買物

- ・ 店までの道順がわかる。
- ・ 必要な商品を選ぶことができる。
- ・ 品物の値段を確認することができる。
- ・ レジに行き請求額に見合った金額を出すことができる。
- ・ レシート、領収書を受け取りおつりの金額を確認して財布に入れることができる。
- ・ 品物をレジ袋やエコバックに入れることができる。
- ・ 店内でのマナーを守って行動することができる。
- ・ 購入した商品に名前を書いて所定の場所にしまうことができる。

(4) 小遣い帳の記入

- ・ 必要に応じて記入することができる。
- ・ 収入、支出を区別して適切に記入することができる。
- ・ 収入、支出の合計金額を出して残金を計算することができる。
- ・ レシートを日付順に貼る事ができる。
- ・ 金種、等価関係が分かり金銭を数えることができる。

(5) 集団活動

- ・ 自主的に仕事を探して活動に参加することができる。
- ・ 周囲の人と協力して活動することができる。
- ・ 場に合った適切な態度や発言をすることができる。
- ・ 最後まで責任を持って役割を果たすことができる。

(6) 日課の理解

- ・ 一日の流れを理解している。
- ・ 時間を意識して行動することができる。
- ・ 日課に従って生活することができる。

(7) 決まり

- ・ 寄宿舎の決まりを理解している。
- ・ 決まりを守って生活することができる。

(8) 公衆電話の利用

- ・ テレホンカードを使い電話をかけることができる。
- ・ 静かに順番を待つことができる。
- ・ 電話番号を間違わずにかけることができる。
- ・ 適切な言葉で話し用件を伝えることができる。

3 健康・安全

(1) 交通ルールを理解

- ・ 信号機を理解し従うことができる。
- ・ 周囲の状況に気を付けて歩行することができる。
- ・ 交通ルールを守って歩行することができる。

(2) 避難訓練における理解

- ・ 非常放送を聞き理解することができる。
- ・ 指示に従って避難場所へ移動することができる。
- ・ 適切な態度や姿勢で避難することができる。
- ・ 避難場所では指示に従い静かに待機することができる。

(3) 病気の予防

- ・ 寒暖や天候に応じて衣類の調節をすることができる。
- ・ 外出後にうがい、手洗いをすることができる。
- ・ 体調を考えて生活することができる。

(4) 不調の訴え

- ・ 体の不調に気付きに訴えることができる。
- ・ 体の不調を適切に伝えることができる。

(5) 衛生に関すること

- ・ 定期的につめ切り、耳掃除をすることができる。
- ・ はんかち、ちり紙を常に携帯することができる。
- ・ 身体の汚れに気付き清潔を保つことができる。

4 対人関係

(1) 交友、異性関係

- ・周囲の人と適切なかかわりをもつことができる。
- ・異性と適切な距離を保ってかかわることができる。

(2) 言葉の受容、表出

- ・相手の話を聞き理解することができる。
- ・自分の意見や思いを適切に伝えることができる。
- ・適切に会話をすることができる。

(3) 言葉遣い

- ・目上の人に対して敬語を使うことができる。
- ・丁寧な言葉で話すことができる。

(4) あいさつ・礼儀

- ・積極的にあいさつをすることができる。
- ・場面に合ったあいさつをすることができる。
- ・適切な返事をするすることができる。
- ・相手の顔を見て話すことができる。
- ・周囲の状況や相手の都合を考えて行動することができる。

平成 2 2 年 3 月作成
平成 2 3 年 2 月見直し

フェイスシート / 実態把握 (寄宿舍)

(新規作成日 : 平成 2 2 年 ○ 月 ○ 日 / 作成者 : ○ ○ ○ ○)

区分	項 目	実 態
身 辺 自 立	起床 洗面 歯磨き 入浴 排泄 生理の手順 (女子) 食事 整理整頓 洗濯 清掃	
社 会 性	公共機関の利用 交通機関の利用 買物 小遣い帳の記入 集団活動 日課の理解 決まり 公衆電話の利用	・ 支援手帳に入るものです。 ・ 自立した項目については記入の必要はありません。 ・ 表記参考資料を参考に細かな実態を記載し目標へつなげてください。
健 康 安 全	交通ルールを理解 災害時における理解 病気の予防 不調の訴え 衛生に関すること 定時服薬	
対 人 関 係	交友、異性関係 言語の受容、表出 言葉遣い 礼儀作法 あいさつ、返事	
備 考	余暇・・・ 性格・行動・・・ 上記の区分に当てはまらないものがあれば記入。	、 は必ず記入して下さい。 記載なければ削除して下さい

平成 2 2 年度

個別の指導計画

男子○室 生徒名 ○○○○

学年・学科 ○年○○科

I Q - ○○

舎室担当名 ○○○○

区分	項 目	実 態	前期指導目標	指導の手立て
身 辺 自 立	起床 洗面 歯磨き 入浴 排泄 生理の手順 (女子) 食事 整理整頓 洗濯 清掃			
社 会 性	公共機関の利用 交通機関の利用 買物 小遣い帳の記入 集団活動 日課の理解 決まり 公衆電話の利用			
健 康 安 全	交通ルールを理解 災害時における理解 病気の予防 不調の訴え 衛生に関すること 定時服薬			
対 人 関 係	交友、異性関係 言語の受容、表出 言葉遣い あいさつ、礼儀			
備 考				

前 期 評 価	後期指導目標	指導の手立て	年 間 評 価

H 2 2 年 度 舍 室 経 営 計 画

男子○室 舎室担当者名 _____

舎室構成	生徒氏名	学年・学科	生徒氏名	学年・学科

舎生の実態	
舎室経営目標	
舎室経営目標反省	

第V章

研究の成果と課題

1 今年度の取り組み

昨年度から第5次研究「社会参加・自立をめざした働く力の育成（教育課程の編成と授業の充実を目指して～）」をスタートさせ、今年度が2年目である。同じく昨年度、教育課程が一部変更され、教科学習（授業）としての「国語」と「数学」がスタートした。学年別グループで取り組む課題研究においては、研究の方法は異なるものの、国語・数学的な指導に関する内容を含む研究がなされた。またプロジェクト研究では、昨年度取り組んだ指導内容表の整理に続き、教育課程検討委員会を中心として、個別の教育支援計画・個別の指導計画・通知表の在り方についての研究がなされた。そして寄宿舎では、昨年度に引き続き実態把握と指導計画の様式についての研究を進めた。一方、進路指導部が行っていた現場実習・進路指導に関する調査研究については、昨年度までに数々の成果と課題を明らかにすることができ、一定の役割を果たすことができた判断したため、今年度は実施しなかった。

2 成果と課題

（1）課題研究

1 学年部会では、1 学級 1 名ずつ計 3 名の生徒を抽出した事例研究を行った。3 事例とも共通して「よりよい人間関係の形成において必要な、見聞きし、考え、伝える力の指導」という主題のもと、コミュニケーション能力を高める指導のあり方の研究を推進した。相手の気持ちを考えた言動、場面に応じた言動、意思を明確に表明する、正しく発音する…など、様々な課題を複合的に持つ生徒を抽出した。国語の授業や毎日の日記、問題となる言動があった時点での即時指導など、あらゆる場面で指導を繰り返してきた。その結果、失敗はするが時間をかければ望ましいコミュニケーションを考えることができたり、問題となる言動が少しずつ減ってきたといった成果が現れてきた。今後は、生徒の課題点や問題の背景・条件を分析し、それを含めた実態に基づいて指導の手立てを工夫していくこと、そしてコミュニケーション能力を高めることでソーシャルスキルの獲得へとつなげていくことが課題となるだろう。

2 学年部会では、昨年度の研究成果と課題を踏まえ、教科指導と領域・教科を合わせた指導の連携による数学的な力の育成に取り組んだ。基礎となる知識を身につけたり、また身につけた知識を活用（応用）する実践力も身につけたりできるよう、指導方法の工夫をした。お互いの授業を見合ってヒントを探り、数学の担当者以外も授業を見ることで生徒の実態を捉え、それぞれの指導に反映することができた。作業学習や現場実習で知識をいかすことができたという成果も見られた反面、授業間の連携を強化し、まだ定着できていない生徒にどのように働きかければよいのかを探究し続けることが今後の課題となるだろう。

3 学年部会では、昨年度 3 名の生徒を抽出した事例研究を行っていたが、今年度はこのうち 1 名に絞り、人とかかわり方を身につけるための支援のあり方を研究した。ICF の視点を取り入れた環境分析や、ソーシャルスキルトレーニングの指導方法を取り入れた支援の繰り返しから、いつでも・どこでも・誰にでも自分の意思を言葉で相手に伝えることができるようになりつつある。本生徒は先日卒業したが、進路先でも本校で身につけたコミュニケーションの力

を生かし、また一層伸ばし、よりよい人間関係を築いていけることを期待したい。

(2) プロジェクト研究

教育課程検討委員会ではワーキンググループを編成し、道内知的障害単置高等部・特別支援学校を対象に調査を行い、本校職員や保護者へのアンケートも実施した。その結果、「支援計画は本人・保護者のもの」という意識が浸透していないことや、中学校からの引き継ぎが不十分であったこと、実際に効果的に活用されていない実情など、様々な課題が浮き彫りとなった。これを踏まえて今後の方向性を導き出した段階で今年度の研究は終わっているが、単に見やすさ・書きやすさを追求した様式変更だけではなく、支援・指導に役立てられるものを作り上げることを目指して改め直していくことが求められている。

(3) 寄宿舎の研究

寄宿舎では、実態把握のためのフェイスシート、個別の指導計画、舎室経営計画のあり方についての研究を継続して行っている。様式の改訂と、評価の段階を記した「記述の観点」の再検討を重ね、保護者や関係機関、職員に対してもわかりやすい形を目指している。今後は ICF の理念に基づいた指導計画の検討も進める必要がある。

3 次年度へ向けて

昨年度の指導内容表の研究、課題研究で昨年度から取り組んでいる実践をとおした研究、今年度から始まった指導計画と評価の在り方についての研究の3つを効果的に組み合わせることで、「Plan-Do-Check-Act (計画 - 実行 - 評価 - 改善)」のサイクルを形成することができる。各研究グループで行われた研究の成果と課題は、各研究グループ内で把握しておけばよい、というものではない。研究グループという枠を超えて学校全体で共有するべきであり、それができてこそ、本校としての研究の成果と言える。

次年度は第5次研究の最終年となる。昨年度・今年度の研究の成果と課題を踏まえた研究を推進し、第5次研究に取り組んだ本校としての成果と課題を、しっかりとまとめあげていかなければならない。その過程を経て、開校15周年を迎える本校がこれまで積み上げてきた、働く力を育成するための「PDCA」が見えてくるものと思われる。これに加えて、学習指導要領の改訂やキャリア教育の観点の浸透、多様な困難を抱え変化する生徒実態、雇用情勢の変化といった情勢も踏まえ、これからの「PDCA」をしっかりと形成していく必要がある。

あとがき

本年度の研究紀要がまとまり、ここに第13号として発刊できることは本校職員の努力の賜であると感じているところです。校内研究の推進役としての研修部、各学年の研究者には感謝しています。

「社会参加・自立を目指した働く力の育成」を研究主題に教育課程の編成と授業の充実を目指して第5次研究（3年間の2年目）として進めてきました。

課題別研究；各学年(国語、数学、生活単元学習、作業から選択)

プロジェクト研究；教育支援計画、指導計画、通知表のあり方の整理

昨年度より、生徒たちの「働く力」「生活する力」をどのようにして授業の中で積み上げることができるか仮説を立てながら、指導内容表に照らし合わせ研究を進めてきました。

さらに今年度は、東京都立港特別支援学校主任教諭(特別支援コーディネーター)である川上康則氏による特別支援教育研究会を開催し、セクションで基礎理論、セクションにおいて実践編として研修をふみ、特設の校内授業研や通常授業の授業公開さらに研究発表会等を数回に分け研究を進めて参りました。

最後になりますが、研究成果に関してはまだまだ不十分であり、今後も教員一人一人が研究、研鑽に励み研究成果を本校の教育に役立てていく所存です。

本校の教育推進のためにも、皆様にご一読賜り、ご意見、ご指導をいただければ幸いです。

平成23年3月

北海道今金高等養護学校教頭

佐々木 雅士

共 同 研 究 者

学校長 播磨 正一
教 頭 佐々木雅士
事務長 孰賀 守

< 教務部 >

1 学年 山田 賢一、佐々木真由美、阿部 昌弘、東海林栄徳、三条真知子
小原 雄一、早坂 麗子、青野由香利、西牧 孝徳、武田 資
丸山 充代、豊島 猛志、入田 貴広、小室 育恵、橘 晴美
2 学年 高佐 裕一、今野 優子、田中 郁江、福寿 吉人、小松 裕樹
矢倉 一、阿部いく子、山柿 紘子、加藤 奈都、廣澤 和治
大口 香織、岩城 研太、小林 吾一、藤倉 雄一、水野 直子
中島 朋之
3 学年 安田 聡史、太田智恵子、熊谷 嘉朗、鈴木 美彩、金子 亘喜
皆川 陽子、吉村 友里、近藤 和也、天満 理恵、若山 大輔
木村 幸子、安田美也子、及川 文雄、渡辺小百合、南波 李佳
金子英利香

< 舎務部 >

工藤 隆司、上山 真人、中野 寛、山田 直人、川村 洋二
伊藤 亮、松谷さおり、和田 雅史、清野 恵美、菅原 敏
山本 絵理、泉波 卓也、藤田 美華、齋藤 直美、三澤麻衣子
山内 和美、大友 咲子

< 行政 >

遠藤 史憲、山崎 直樹、森屋 香、川崎 澄子、中村 和子
高野美智代、庫元 栄子

平成 2 2 年度 研究紀要 **創** TSUKURU 第 1 3 号

発行者 北海道今金高等養護学校長 播磨 正一

発行日 平成 2 3 年 3 月 3 1 日

〒 0 4 9 - 4 3 0 4 北海道瀬棚郡今金町字今金 4 5 4 番地 1

T E L (0 1 3 7) 8 2 - 3 1 2 1

F A X (0 1 3 7) 8 2 - 3 0 9 2